教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 英語グローバル学科　　資格： 教授　　氏名： 玉井　暲

研究分野	研究内容のキーワード
英文学	・イギリス世紀末文学　・英国小説　・現代批評理論
学位	最終学歴
博士（文学）,文学修士,文学士	大阪大学大学院 文学研究科 英文学専攻 修士課程 修了

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1.Paul A.S. Harvey, *Eco-Friendly Japan* （英宝社）	2008年1月	日本に長く在住し、日本の大学の文学部英文科で英文学を講義しているイギリス人学者ポール・ハーヴィ教授が著わした日本文化論、日・欧・アジアの比較文化論について、編集と注解を行った。（共同編注者：大森文子）
2.Oliver Parker, *An Ideal Husband, Based on the Play by Oscar Wilde* （英宝社）	2001年1月	イギリスの映画監督オリヴァー・パーカーがイギリス１９世紀末の作家オスカー・ワイルドの劇『理想の夫』を映画化した。その脚本のスクリプト版について、編集と注解を行った。映画版タイトルは『理想の結婚』。（共同編注者：沖田知子）
3.Susan Sontag, *AIDS and Its Metaphor* （英宝社）	1992年12月	アメリカの現代の批評家・小説家スーザン・ソンタグの著書『エイズとその隠喩』について、編集と注解を行った。（共同編注者：米本弘一）
4.Susan Sontag, *Illness as Metaphor*（英宝社）	1983年1月	アメリカの現代の批評家・小説家スーザン・ソンタグの病いの文化論についての著書『隠喩としての病い』について、編集と注解を行った。
5.Arthur Symons, *The Symbolist Movement in Literature* （大阪教育図書）	1980年4月	イギリス世紀末の批評家アーサー・シモンズの批評論集『文学における象徴主義運動』について、編集と注解を行った。（共同編注者：正木建治）
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.教員免許　中学校教諭　専修免許（英語）	1971年03月31日	
2.教員免許　高等学校教諭 専修免許（英語）	1971年03月31日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.イギリス世紀末文学の詩学――ウォルター・ペイターとオスカー・ワイルドーー	単	2024年2月	金星堂	ウォルター・ペイターとオスカー・ワイルドを中心に、ジョン・ラスキンとアーサー・シモンズをも視野に入れて、イギリス世紀末文学の言説空間の特質をテクスト構造と言語意識に注視して解明をめざす。イギリス世紀末文学の詩学の孕む今日的意味を探る研究である。 その構成は、「はじめに」、第１部：ラスキンとペイターの詩学、第２部：ペイターの文学、第３部：ワイルドの文学、第４部：シモンズの象徴主義、から成る。 xiv ＋ 458 pp.
2.ネーミングの言語文化	共	2022年10月	武庫川女子大学言語文化研究所	本書は、武庫川学院創立８０周年を記念して、武庫川女子大学言語文化研究所が、「言文研研究叢書No. 1」として刊行した研究論文

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				集。「ネーミングの言語文化」に関する諸問題について、本研究所の研究員９名が、それぞれ自分の関心のある角度から論じた論文を収録している。 玉井は、本書の編集者として「まえがき――ネーミングの言語文化」（pp. 4-8）の他に、論文「外国文学の翻訳におけるネーミングの諸相――タイトルの訳し方、タイトルの付け方、登場人物の命名」（pp. 58-86）を執筆した。 本書は、総ページ、１８６ページからなるもの。
3.コメディ・オヴ・マナーズの系譜――王政復古期から現代イギリス文学まで――	共	2022年5月	音羽書房鶴見書店	本書は、イギリス文学における伝統的な文学ジャンルの一つと考えられる「コメディ・オヴ・マナーズ」について、その本質的な特徴とその変容・変奏・発展をめぐって、劇と小説の両面から考察したもの。「コメディ・オヴ・マナーズ」の研究については、イギリス文学の極めて興味深いテーマでありながら、日本においては、また英米においても、このテーマを「系譜」という視点から総体的に論じためぼしい研究は見られない。その意味からも、本書は、「コメディ・オヴ・マナーズ」の研究に貢献できる書と言えよう。１０名の執筆者からなる研究書。 玉井は、本書の編集者の一人として、まえがき「コメディ・オヴ・マナーズの系譜――まえがき風のスケッチ」（pp. 2-19）を執筆。また、論文として、「『まじめが肝心』におけるマナーズと欲望の協力／共犯」（pp. 167-197）を執筆した。 iv ＋ ２８０頁。
4.魅力ある英語英米文学――その多様な豊饒性を探して――	共	2022年1月10日	大阪教育図書。	武庫川学院創立８０周年を記念して、武庫川女子大学大学院文学研究科英語英米文学専攻の教員（現在の教員、元教員、学外の非常勤講師を含む）、学生、修了生が寄稿した論文集。英文学分野では、シェイクスピアからトマス・ハーディ、カズオ・イシグロまでの論文１８篇、アメリカ文学分野ではフォークナーから現代アジア系アメリカ演劇までの５篇、英語学・英語教育分野では英語総称文からグローバル教育論までの３篇を含めて、計２６篇の論考からなる論文集。 編者の玉井暲は、本論文集の編集の仕事のほかに、まえがき「英語英米文学研究の喜びを求めて」(pp. i-vii)と、論考「ハーディにおけるリアリズム小説とその逸脱――『ラッパ隊長』の場合――」(pp. 195-217) を寄稿した。 xiii ＋ 553 pp.
5.*Oscar Wilde: The Woman's World*, November 1887-October 1889. 2 Vols.	共	2020年09月	Athena Press / Maruzen eBook Library(Maruzen-Yushodo)	玉井暲、角田信恵。 本書は、すでに冊子体にて刊行した版（２００８年刊）が絶版となっていたため、この度、電子書籍として復刊したもの。ワイルドが、編集長として女性読者を対象に刊行した月刊誌の２４冊を完全復刻したもの。１９世紀末イギリスの文学、文化、思想、女性問題、ジェンダー等をめぐる問題を総合的に把握するのに最適のジャーナルである。
6.オスカー・ワイルドの世界	共	2013年05月	開文社出版	玉井暲、富士川義之、河内恵子。 オスカー・ワイルドの文学の世界を、I.ワイルドの作品、II.ワイルド文学の諸相、III.ワイルドと世紀末文化、IV.二一世紀のワイルド、の４つの観点から、総合的に論じた研究書。32名の執筆者から成る。 本人は、編者としての仕事のほかに、論文「文学再生へのインテンション――ワイルドの批評」(pp. 67-82)、「オスカー・ワイルド書誌」(pp. 484-506)を執筆。 xiv ＋ 538 pp.
7.フォースター文学の諸相――小説と小説論――	共	2012年08月	英宝社	玉井暲、筒井均。 E.M. フォースター文学の多面的魅力を、小説と小説論が交差する磁場に注目して、総合的に論じた研究書。9名の執筆者から成る。 本人は、編者としての仕事のほかに、論文「「混乱」としての小説的インパクト――フォースターの小説論を考える――」(pp. 155-87)、「あとがき」を執筆。 xiii ＋ 285 pp.
8.ペイター『ルネサン	共	2012年07月	論創社	玉井暲、伊藤勲、上村仁司、上村盛人、十枝内康隆、野末紀之、蜂

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
ス』の美学――日本ペイター協会創立五十周年記念論文集				巣泉、森岡伸。 日本ペイター協会編。ウォルター・ペイターの代表作『ルネサンス』のもっている今日的意味を、第１部「芸術家論」、第２部「『ルネサンス』の諸相」、第３部「ペイターと中世」、の３つの観点から全体的に論じた研究書。12名の執筆者から成る。 本人は、編集委員としての仕事のほかに、論文「文学言語の復権をめざして――ペイターの「事実についての印象」の詩学」(pp. 183-203)、「ペイター書誌」(pp. 258-64)を執筆。 277 pp.
9.後期ヴィクトリア朝イギリスにおけるマスキュリニティと友愛の政治学――国際フォーラム報告書	共	2011年03月	武庫川女子大学	玉井暲（アキラ） 平成２１－２４年度科研（基盤B)「後期ヴィクトリア朝イギリスにおけるマスキュリニティと友愛の政治学」にもとづいて開催した国際フォーラム（２０１１年1月１８日、１月２２日）についての報告書である。科研研究メンバーである森岡伸、十枝内康隆、岩永弘人、宮崎かすみ、松村伸一、高島美和、角田信恵、野末紀之から成る各人の活動を収録。本人は、編者としての仕事のほかに、「まえがき」を執筆。 ロンドン大学バークベック・コレッジのブレイディ教授（Sean Brady, Ph.D)による、John Addington Symonds についての講演原稿（英文）と、１９世紀イギリスにおけるマスキュリニティを研究する意義についての講演原稿（英文）のほかに、講演の翻訳、研究メンバーによるコメンタリー等を収録。50 pp.
10.英米文学の可能性――玉井暲教授退職記念論文集	共	2010年03月	英宝社	玉井暲の大阪大学退職を記念して刊行された、大学同僚、学会の友人、教え子たちの論文寄稿によるfestschrift。特別寄稿論文１２編、イギリス文学関係論文４０編、アメリカ文学関係論文１９編のほかに、玉井自身の執筆による「略歴」、「研究業績一覧」、あとがき「深い感謝をこめて」を収録。 viii ＋ 881 pp.
11.芸術とコミュニケーションに関する実践的研究――研究報告書	共	2009年03月	大阪大学（文学研究科）	玉井暲、藤田治彦、奥平俊六、永田靖、伊東信宏、茂木一司。 本書は、『芸術とコミュニケーションに関する実践的研究――日本学術振興会人文社会科学振興プロジェクト＜文学・芸術の社会的媒介機能＞研究報告書』（研究代表者、藤田治彦）である。2004年から2009年にわたる約5年間の研究活動の成果を収録したもの。 本人は、「環境と文学」の部門代表として研究メンバーの29編の論文を編集・収録する仕事のほかに、同テーマを総括するための研究・報告論文「環境と文学――環境文学（Eco-Literature）の可能性とその社会的効用」を執筆した（pp. 72-75）。 「環境」を自明的に外部に存在する世界とみる見方と、「環境」は人間によって発見されるものであって、文化的構築物とみる見方との2つの見方が想定できるが、「環境」をめぐる議論はこの両極的な見方を踏まえて行うことが求められていることを提起した。さらに、この枠組みのなかで、個々の文学テクストをいかに豊かにかつ有意義に読み解くかに、＜環境文学＞の可能性が掛かっていることを主張した。340 pp.
12.１９世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティクス――研究報告書	共	2009年03月	大阪大学（文学研究科）	玉井暲（アキラ）、岩永弘人、角田信恵、十枝内康隆、野末紀之、宮崎かすみ、森岡伸。 平成１８－２０年度科研（基盤Ｂ）「１９世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティクス」にもとづいて研究を行った研究成果の報告書。１９世紀後半のイギリスにおいて、男性性（マスキュリニティ）の理念・規範が文学的・文化的言説によっていかに形成・構築され、いかに脱構築されたかを総合的に検証しようとした研究の成果をまとめた論文集である。本人は、研究代表者としての編集のほかに、「まえがき」、論文５編を執筆・収録。全体として、７名から成るメンバーによる論文、研究報告、書評等を含め、計約３０篇を収録している。160 pp.
13.*Oscar Wilde: The Woman's World*, November 1887-October 1889, 2 vols.	共	2008年01月	Athena Press	玉井暲、角田信恵 イギリス１９世紀末の文学者オスカー・ワイルドが編集した女性向けの月刊雑誌 *The Woman's World* を復刻した。ワイルドが直接に編集担当した2年間の分（24冊）を検証・編集ののち、刊行時のままの状態で完全復刻・出版を行った。1280 pp.
14.トマス・ハーディ全	共	2007年10月	音羽書房鶴見書店	玉井暲、鮎澤乗光、深澤俊、森松健介、藤田繁。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
貌――日本ハーディ協会創立５０周年記念				トマス・ハーディ文学を、小説、短編小説、詩、劇、エッセイ、テーマ別評論の各角度から総体的に考察を行い、その全貌を明らかにすることをめざす。日本ハーディ協会が全力を挙げて編集・執筆にあたった論文集。執筆者総数45名。 本人は、編集作業のほかに、論文「ハーディのリアリズムと手紙の言葉」を執筆した（pp. 742-60）。ハーディの小説空間が伝統的世界と近代性との「相克」を表出している面にハーディ文学の特質が表れているとすれば、ここにはハーディの世界観と言語観が深く関わっている。この「相克」をいかに認識し、いかに対峙し、いかに言語化したのか。ハーディのリアリズムのすべてがこの面に掛かっており、この問題を彼の幾つかの小説世界に登場する「手紙」の機能を分析することにより、考察を行った。 vi＋834 pp.
15.批評理論を読む、テクストを読む――文学研究方法論への挑戦	共	2007年03月	大阪大学（文学研究科英米文学研究室）	大阪大学大学院英米文学専攻における現代批評理論についての演習実績を踏まえ、さまざまな批評理論の紹介とその実践例について解説を試みた。編者として、批評理論の教育をめぐる基本的な問題についての総論を執筆・提起したうえで、みずからの研究方法論を模索する大学院生の研究を助成・促進する意図をこめて、院生の論文を19編収録した。196 pp.
16.＜異界＞を創造する――英米文学におけるジャンルの変奏	共	2006年11月	英宝社	玉井暲、新野緑。 文学ジャンルがその慣習性に固執しつつさまざまに変容する文学世界にあって、＜異界＞というテーマを設定することにより、ジャンルがいかに新しい姿を提示し、あるいは変容を遂げるのか、そして従来のものとは異なるいかなる文学風景を創造できるのか。こうした関心に基づいて英米文学のさまざまな作品の読み直しを試みる論文を18編収録した。本人は、編集の仕事のほかに、「まえがき」を執筆。vii＋400 pp.
17.*New Woman Fiction -- Gender Representation at the Fin-de-Siecle*, Part II, 4 vols.	共	2006年07月	Athena Press	玉井暲、武田美保子。 イギリス小説史のうえで、19世紀末から1920年代にかけて大流行した「＜新しい女＞小説」と呼ばれる種類の小説の中から、代表的な作品を選別して復刻した。ヴィクトリア朝の伝統的な女性像から逸脱したタイプの女性を描いたこの派の小説は、最近、ジェンダー論・女性論等の立場から再評価の動きが出てきているにもかかわらず、作品自体の原本の入手が極めて困難な状態にある。この研究上の不備を補うため、主要な「＜新しい女＞小説」を集めたリプリント・コレクションの出版を手掛けた。Grant Allen を含む5人の小説家の作品5作を収録。1740 pp.
18.*New Woman Fiction -- Gender Representation at the Fin-de-Siecle*, Part I, 5 vols.	共	2005年11月	Athena Press	玉井暲、武田美保子 下記で既述の概要を参照のこと。「＜新しい女＞小説」を集めたリプリント・コレクション。Olive Schreinerを含む3人の小説家の作品6作を収録。2340 pp.
19.病いと身体の英米文学	共	2004年05月	英宝社	玉井暲、仙葉豊。 英米文学において「病いと身体」というテーマはどのように扱われ、表象されてきたのか。このような関心に基づいて、英米文学の主要作家の作品の読み直しに挑戦し、その研究の成果の論文を編集・収録した。15編の論文を収録。本人は、編集の仕事のほかに、「まえがき」を執筆。v＋349 pp.
20.*Regency Dandyism and the Fashionable Novel: Texts and Studies*, Part II: The Fashionable Novel (2), 9 vols.	共	2003年12月	Hon-no-Tomosha	玉井暲、松村昌家。 イギリス小説史のうえで、1820年代から'40年代にかけて、「ファッショナブル・ノヴェル」（別名「社交界小説」、あるいは「貴族小説」、「上流社会小説」、「ダンディ派小説」とも呼ばれる）という種類の小説が大流行した。この派の小説は、「リージェンシー」（1811－20の摂政時代）の文化的特徴を色濃く反映して、上流階級の紳士淑女、政治家、ダンディたちが織り成す華やかな生活風景、風習、風俗を鮮やかに描き出しており、特異な文学作品群を形成している。従来、19世紀において文学・文化が大衆化への道をたどる過程を研究するうえで極めて重要な種類の小説でありながら、作品

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				自体の原本の入手が極めて困難であった。この研究上の不備を補うために、「ファッショナブル・ノヴェル」のリプリント・コレクションの出版を手掛けた。Bulwer-Lytton, *Pelham* を含む、3人の小説家の作品3作を収録した。3004 pp.
21. *Regency Dandyism and the Fashionable Novel: Texts and Studies*, Part III: Early Studies, 6 vols.	共	2003年12月	Hon-no-Tomosha	玉井暲、松村昌家。 下記の概要を参照。「ファッショナブル・ノヴェル」のリプリント・コレクション。本テーマに関わりのある文献・参考資料を4点収録した。2034 pp.
22. *Regency Dandyism and the Fashionable Novel: Texts and Studies*, Part I: The Fashionable Novel (1), 7 vols.	共	2002年12月	Hon-no-Tomosha	玉井暲、松村昌家。 下記の既述の概要を参照。「ファッショナブル・ノヴェル」のリプリント・コレクション。Benjamin Disraeli, *Vivian Grey* を含む、4人の小説家の作品4作を収録した。2850 pp.
23. 批評の現在――哲学・文学・演劇・音楽・美術	共	1999年10月	和泉書院	玉井暲、鷲田清一、坪内稔典、木村健治、渡辺裕、川田都樹子。 「批評（クリティシズム）」が現代という時代においてどのような意味・機能・役割をもっているのかを、哲学、文学、演劇、音楽、美術のそれぞれの分野において検証・考察した論文6篇を収録した。 本人は、「作者のゆくえ――ポスト構造主義の文学批評」を執筆（pp. 39-80）. 246 pp.
24. オスカー・ワイルド事典――イギリス世紀末大百科	共	1999年03月	北星堂	玉井暲、山田勝、西村孝次、井村君江、荒井良雄、川崎淳之介、河村錠一郎、富士川義之、河内恵子、そのほかを含む計14名。 オスカー・ワイルドを研究するうえで問題となるテーマ、登場人物、作品、周辺の実在の人物、影響を与えた作品・作家等について網羅的に検証したうえで作成した、ワイルドについての文学事典。併せて、世紀末文学全体についての事典とすることをもめざしている。日本ワイルド協会が総力をあげて編集・作成した事典。 本人は、編集の仕事のほかに、ヴィンケルマン、エピキューリアニズム、グローヴナー・ギャラリー、ダーウイニズムなど、１０項目の執筆を担当。xlvii＋746 pp.
25. トマス・ハーディと世紀末	共	1999年03月	英宝社	玉井暲、森松健介、井出弘之、土岐恒二。 19世紀後期から20世紀初頭にかけて活躍したイギリスの小説家・詩人であるトマス・ハーディの文学を、「世紀末」という特異な文学・芸術現象、思想的特徴の観点から読解すればどのような新しい面が発掘できるのか。こうした関心に基づいて考察した4人の論考4篇を収録している。 本人は、「リトル・ファーザー・タイムと世紀末文学――『日蔭者ジュード』論」を執筆（pp. 47-83）。 vi＋156 pp.
26. 教養のためのイギリスの文学	共	1985年03月	東海大学出版会	玉井暲、内多毅、杉本龍太郎、内田能嗣、そのほかを含む計23名。 イギリス文学における主要作家の代表作品について、その作品のなかの重要な叙述箇所の抜粋と注解を行ったうえ、簡潔な作品論を添付し、本全体としてイギリス文学史となることをめざしている。 本人は、「『イン・メモリアム』―詩人の成長」、「『指輪と本』―詩についての詩」、「『真面目が肝心』―ダンディの試練」を執筆。 250 pp.
2 学位論文				
1. イギリス世紀末文学におけるテクストと言語――ペイターとワイルド	単	1999年11月	海川企画出版部	世紀末文学の意味を、ヴィクトリア朝文学とモダニズム文学との相互関係のなかで考察し、従来の見方に修正を加え、モダニズム文学との連続性を明らかにすることにより、世紀末文学固有の特質を考察した。取り上げた中心的な作家は、ジョン・ラスキン、ウォルター・ペイター、オスカー・ワイルド、アーサー・シモンズの４人。本論文は、「序」、本論１８章、注・引用文献、参考文献から構成されており、総頁は、viii ＋358 頁。博士論文。
3 学術論文				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
1.『文章読本』の系譜（査読付き）	単	2024年3月31日	武庫川女子大学言語文化研究所『年報』、第３４号、25-42　頁	谷崎潤一郎の『文章読本(1934年）をもってその嚆矢とする「文章読本」の系譜を概観し、「芸術的な文章」と「実用的な文章」には区別がないことを主張した谷崎の文章観がもっている今日的意味を考察した。昨今、高校の国語教科書において大きな話題となっている、教育教材から文学作品が排除された現実を取り上げ、その教育方針は谷崎の論に基づいて考察すれば成り立たないことを検証した。また、昆虫図鑑に見られるような「記述的な文章」も、読者にとっては人間形成に深く関わる気品のある文章となりうることを、奥本大三郎と向井敏の論考を基にして例証した。「文章読本」の多面的な文化的意味を解明することをめざす論考。
2.ホイッスラーと世紀末文学の詩学――ワイルド、ペイター、シモンズ　（査読付）	単	2022年12月	日本ワイルド協会『オスカー・ワイルド研究』第２１号、pp. 7-39.	イギリス世紀末文学を構成する文学者たちは、美術批評を盛んに行っている事実に注目し、彼らは、理想の絵画観を考究するなかで、そのアナロジーとして理想の文学観を構築していくありようを検証した。絵画が逸話性から解放された自立的な色彩空間をめざしたように、文学は外界の基準、論理、倫理・道徳観からは自由な、言葉という表現言媒体によってのみ構築される自立的な言語空間を理想とした、と結論づけた。 ワイルドのほかに、ホイッスラー、ラスキン、ペイター、シモンズ、ヘンリー・ジェイムズの絵画論を検討した。
3.トマス・カーライルの「衣装の哲学」――１９世紀英国におけるダンディズムの流行――」（査読付）	単	2021年11月30日	武庫川女子大学生活美学研究所編集委員会編、『武庫川女子大学生活美学研究所紀要』、第３１号、pp. 148-166.	イギリス１９世紀の思想家・小説家であるトマス・カーライルの代表的小説『衣装哲学』に関して、①この作品が土井晩翠およびその弟子で建築家であった遠藤新にとっていかなる意味をもっていたのか、②『衣装哲学』に窺える建築的モチーフは何を意味しているのか、③『衣装哲学』のなかで展開するダンディズム批判の意味とは何か、④フランスの１９世紀中期・後期およびイギリスの世紀末におけるダンディズムの流行はいかなる意味をもっていたのか、等々の問題を検証・考察し、イギリス１９世紀における表層的／深層的な文化観および思想のもつ両義的特質について考察した。
4.オースティンのピクチャレスク風景をジョン・ラスキンのピクチャレスク観から見る（査読付）	単	2021年6月26日	日本ジェイン・オースティン協会『ジェイン・オースティン研究』、第１５号、pp. 1-24.	オースティンの『高慢と偏見』では、エリザベスはダーシーのペンバリー屋敷を見物することにより、風景の中に精神性を見る見方を学ぶ。風景を軽薄なピクチャレスク的関心から見る見方を棄て、精神性の表象と見るようになる。このオースティンの風景観の変化を、後世の美術批評家ジョン・ラスキンのピクチャレスク観との対照において検証し、オースティンの後期小説において発展・深化する風景観とは、ラスキンの道徳的な「高次のピクチャレスク風景」に相当するものと結論づける。
5.文学作品における登場人物のネーミング	単	2020年3月	武庫川女子大学言語文化研究所『言語文化研究所年報』、第３０号、pp. 111-21.	文学作品において、登場人物のネーミングには、大きくは２つの命名観――①名前本性論と、②命名の恣意性――にもとづいて実行されていることを、ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』、ヘンリー・ジェイムズ『象牙の塔：創作ノート』、チャールズ・ディケンズ『互いの友』、オスカー・ワイルド『まじめが肝心』の検証をとおして考察した。文学作品では、名前本性論が、概ね有力であることが判明したが、前衛的な作品ではその限りでない可能性をも示唆しておいた。
6.ハーディにおけるリアリズム小説とその逸脱――『ラッパ隊長』を中心に　（査読付）	単	2018年09月15日	『ハーディ研究』（日本ハーディ協会会報）、第４４号、pp. 1-16.	トマス・ハーディの小説は、リアリズム小説でありながら、「偶然の一致」などと称されるプロットの展開が見られ、これが欠点として指摘されることが多い。しかし、この特質はヴィクトリア朝のリアリズム小説が抱えていたアポリアとも言うべき課題と結びついたものである。すなわち、リアルなる事柄と物についてのリアルな記述を求めれば、その果てに退屈・単調という課題が待ちかまえていた。『ラッパ隊長』は、ハーディにおけるこのリアリズム小説の難題に挑戦した小説とみなして、その読解を試みた。
7.「新しい女」とイギリス世紀末文学（査読付）	単	2017年07月07日	『グリム童話と表象文化――モティーフ・ジェンダー・ステレオタイプ』（大野寿美子編）、勉誠出版、pp. 239-55.	英国小説史の上で、１９世紀イギリス・ヴィクトリア朝末期から２０世紀初頭にかけて、「新しい女（new woman)」と呼ばれるタイプの女性を主人公とする小説が大流行した。それは、ヴィクトリア朝における伝統的な女性像の典型が「家庭の天使」だとすれば、その反対に、伝統的な慣習の枠を逸脱して自由に生きる女性のタイプであった。この新しいタイプのヒロインは、小説だけでなく、演劇や美術の世界にもみられる女性像であった。本論では、演劇作品を中

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				心にして、オスカー・ワイルの『ウインダーミア夫人の扇』と『サロメ』、G.B.ショーの『ウォレン夫人の職業』、アーサー・ウイング・ピネロの『タンカレー氏の後妻』、オーブリー・ビアズリーのイラストレーションに登場する「新し女」を取り上げ、このモティーフが、新旧の価値観・芸術観の交錯し衝突する世紀末文学において展開するありようを検証し、その意味を考察した。
8.オスカー・ワイルドの装飾芸術論（査読付）	単	2016年03月	『文藝禮讃――イデアとロゴス――：内田能嗣教授傘寿記念論文集』(内田能嗣教授傘寿記念論文集刊行委員会編、大阪教育図書、x＋942 pp.）、pp. 761-69.	オスカー・ワイルドはその批評的エッセイにおいて「装飾芸術（the Decorative Arts）」を礼讃している。この芸術観の根底には、現実再現的表現を前提にして三次元の空間と対象を再現しようとする西洋の伝統的な芸術観に対して、それを超越し、二次元的、純粋装飾的空間を前提とする新しい芸術観の創造をめざそうとする発想があることを、E.H. ゴンブリッチ、高階秀爾の論を踏まえて考察し、ワイルドの芸術観の特異性とその意味を明らかにした。
9.ラフカディオ・ハーンと津波　（査読付）	単	2014年08月	『イギリス文学と文化のエートスとコンストラクション――石田久教授喜寿記念論文集』（同記念論文集刊行委員会編）、大阪教育図書、pp. 435-45.	ラフカディオ・ハーンが『仏の畑の落穂』の中で発表した作品「生き神様」（‘A Living God,’ 1897)は、「津波」を文学の中で描いた英文学史上最初の、そして他にあまり例を見ない文学作品である。この作品が、日本の庶民層に窺える高潔な宗教的心性に注目した洞察力に富むエッセイであるとともに、フィクション創造の原理に基づいて構築された優れた物語作品でもあることをも検証し、ハーン文学の魅力と評価される特質の解明を試みた。
10.言語テクストと映像テクストのはざまで――イギリス世紀末文学の面白さ：オスカー・ワイルド『サロメ』の場合（査読付）	単	2012年03月	*Profectus*（武庫川女子大学大学院英語英米文学専攻研究会編）、第１７号：91-105.	イギリス世紀末文学の特質として、言語テクストと映像テクストが相互に拮抗あるいは対立する状況が出現している事実を指摘し、こうした文学的・文化的現象が、ワイルドの劇とビアズリーの挿絵から構成された作品である『サロメ』という１つのテクストにおいて、「コラボレーション」のかたちで鮮やかに実現しているありようを明らかにした。
11.イギリス世紀末文学と言語意識　（査読付）	単	2011年01月	『中部英文学』（日本英文学会中部支部編）、第３０号：125-36.	イギリス世紀末文学の言語意識においては、「対象それ自体」をあるがままに見ようとする姿勢と、「対象についての印象」をあるがままに認識しようとする姿勢との２つの型があることを、ペイター、ラスキン、アーノルド、ワイルド、ホイッスラー、ヴァージニア・ウルフらの著作を検証することにより明らかにし、世紀末文学の詩学の特質を考察した。
12.批評家としてのオスカー・ワイルド（査読付）	単	2009年05月	風呂本武敏編『アイルランド・ケルト文化を学ぶ人のために』,世界思想社、pp. 164-73.	批評理論家としてのオスカー・ワイルドが提唱する「創造的批評」についての理念と「創造的批評」の実践例を提示した、注目のエッセイ「芸術家としての批評家」を分析・考察したもの。ワイルドの批評が、読者受容理論を含むポスト構造主義の現代批評理論の先駆者としての側面をもつことを明らかにした。
13.ワイルドのジャーナリズムに対するアンビヴァレンス（査読付）	単	2009年03月	日本ワイルド協会編『オスカー・ワイルド研究』、第１０号：１３－１７.	ワイルドは、1880年代の後半には女性向け月刊誌*The Woman's World*の編集長を務め、また主要文学作品を幾つかの雑誌に掲載するなど、ジャーナリズムとの関わりが深いにもかかわらず、’90年代にはいるとジャーナリズムに対して敵対的な発言が多くなる。このアンビヴァレントな姿勢のなかに、ワイルドが持っていた、近代社会における「大衆（性）」の孕む問題性への鋭い洞察が窺えることを検証した。
14.ペイター文学の可能性　/　ペイター文学の原風景	単	2008年10月	日本ペイター協会編『日本ペイター協会会報』、第29号：４－８.	ペイターが唯美主義批評において対象とすべき「オリジナル・ファクト」とは、「あるがままの印象」に当ることを明らかにしたうえで、この文学姿勢と、ラスキン、アーノルド、ヴァージニア・ウルフらの「ファクト」観とをどのように関連付けられるのかを考察した。また、「ファクト」と「印象の世界」が併存し融合する文学空間こそ、ペイターの理想の物語空間であることを示唆した。
15.シャーロット・ブロンテ小説の可能性――『シャーリー』の	単	2008年10月	日本ブロンテ協会編『ブロンテ・スタディーズ』、第	シャーロット・ブロンテ小説の問題点あるいは特徴は、代表作『ジェイン・エア』によく表れているように、女性の自立を激しく主張する思想小説的側面と巧みな、面白い物語を創造したいという

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
場合　（査読付）			4巻第6号：１－１８．	物語作家的側面との葛藤にある。この特徴は、作品としては不成功だとの評価が与えられている『シャーリー』に大きく露呈している。しかしこの部分を、小説の欠点として閑却するのではなく、むしろシャーロットの小説家としての可能性を秘めた叙述として評価できることを示唆した。
16.文学・芸術は＜エコ＞にどのように貢献できるのか？（査読付）	単	2008年10月	吉岡洋・岡田暁生編『文学・芸術は何のためにあるのか?ーー未来を拓く人文・社会科学シリーズ第17冊』、東信堂、pp. 105-13.	環境文学の代表としてイギリス19世紀中期の文学・美術批評家ジョン・ラスキンを評価する論。ラスキンの「きれいな」大地・水・空気を求める思想が今日の社会において実現困難な論であるにしても、その精神は、ユートピア小説、国立公園、ナショナル・トラストに生かされ、また、自然をありのままに見つめる姿勢を人々に喚起することとなり、ここに文学・芸術の教育力を示唆したラスキンを評価する根拠があることを明らかにした。
17.批評理論と英文学教育ー英語を教えること、英文学を教えること	単	2008年9月	日本英文学会編『日本英文学会第80回全国大会Proceedings』、pp. 203-05.	日本英文学会第80回全国大会におけるシンポジウム「英語を教えること、英文学を教えること」において発表した原稿をまとめたもの。批評理論を教室で教える際の問題点について、「英米における批評理論教育について」、「理論の実践例の示し方、批評理論教育の難しさーーpluralismとcomitment のはざまで」、「文学研究にはtheory-free はあり得ない」といった観点から考察を加えた。最後に、「私の批評理論教育」として、学生がみずからのテンペラメントに合った批評理論を発見し、みずからの文学観を確認するための大きな契機となることを期待するものである、として結論づけた。
18.ワイルド編集による*The Woman's World* の復刻に当たって	単	2008年01月	『別冊解説:*Oscar Wilde, The Woman's World, November 1887-October 1889*, ed. Akira Tamai and Nobue Tsunoda』、Athena Press, pp. 1-6.	オスカー・ワイルドが編集担当した*The Woman's World* の2年間分の雑誌について、その内容を詳しく分析し、その特徴とこのジャーナルの果たした意義・機能を明らかにするとともに、現時点においてこのジャーナルを完全な形で復刻することの意味について論じた。
19.新しい女＞小説の諸相――小説・演劇・絵画	単	2006年07月	『別冊解説:*New Woman Fiction -- Gender Representation at the Fin-de-Siecle*, ed, Akira Tamai and Mihoko Takeda』、Athena Press, pp. 1-11.	新しい女＞小説に登場する女性主人公は、小説の中で描かれるだけでなく、オスカー・ワイルド、ジョージ・バーナード・ショー、アーサー・ウィング・ピネロらの劇作品や、オーブリー・ビアズリーらの世紀末の画家の作品にも登場していることを明らかにし、この派の小説がもっていた広範な文学的・文化的意味を確認した。
20.批評の修辞的身体（査読付）	単	2006年03月	日本ワイルド協会編『オスカー・ワイルド研究』、第7号：５５－５９．	ワイルドの批評が「逆説（パラドックス）」というかたちをとることに注目し、ここに機能している「主体」は、慣習的に安定した自己などではなく、相手から得る強烈な反応との力学のなかで存立しうるダイナミックな集合体としての主体である。この「主体」を修辞的身体と呼び、この観点からワイルドの批評の言葉の特質を明らかにした。
21.美の遺伝ーラフカディオ・ハーンの日本文化論　（査読付）	単	2005年11月	『英語・英文学の視座――上山泰教授喜寿記念論文集』(同論文集刊行会編)、大阪教育図書、pp. 239-49.	ハーンの文化論のなかに遺伝的発想が浸透していることを明らかにしたうえで、この思想が、ハーンにあっては、一つの文化あるいは民族における美の感覚の継承という問題と密接に結びつけられていることを指摘した。
22.芸術家たちの結社ーーラファエロ前派（査読付）	単	2005年08月	川北稔編『結社のイギリス史――クラブから帝国まで』、山川出版	ロセッティ、ミレー、ハントらのラファエロ前派の画家たちは、みずからの芸術家グループの理念として「自然にとっての真実」を掲げ、自然主義を実行した。ところが、その結果としては、絵画空間における「細部部分」の自立という逆説、皮肉な状況が生まれ、

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
			社、pp.163-76.	パースペクティヴを欠いた不自然な自然風景を生み出していることを指摘した。しかし、このような芸術的傾向が後世のウィリアム・モリスらの装飾的空間の創世につながるものとして注目した。
23. J．ヒリス・ミラーの批評再考――ハーディの詩「引き裂かれた手紙」をめぐって　（査読付）	単	2005年03月	富山太佳夫・加藤文彦・石川慎一郎編『テクストの地平――森晴秀教授古稀記念論文集』、英宝社、pp. 183-97.	作品が批評理論を選ぶのか、それとも批評理論が作品を選ぶのか、この両者のあいだに横たわる解決不能の問題性は文学研究にとって極めて興味深い。トマス・ハーディの詩「引き裂かれた手紙」を取り上げ、文学テクストそれ自体とそれを分析するミラーの批評との間に窺われる親密性を検証・考察した。
24.『ヴィレット』（査読付）	単	2005年02月	中岡洋・内田能嗣編『ブロンテ姉妹を読む人のために』、世界思想社、pp. 211-18.	シャーロット・ブロンテの小説『ヴィレット』は、女性主人公ルーシーの婚約者ポールの生と死をめぐって、その結末に多義性を孕むものとして多くの議論を呼んできた。この問題への一つの答えとして、ポールの海外におけるプランテーションの島における死を想像させる叙述には男性性を「去勢する」モチーフが潜伏していることを明らかにし、このモチーフが結末の曖昧さに深くむすびついていることを指摘した。
25. ペイターとロマンティック・コネクション	単	2004年10月	日本ペイター協会編『日本ペイター協会会報』、第25号：５－６.	ウォルター・ペイターの文学がいかにロマン主義と深い関わりを持っているかを、そのエッセイにおける屈折したとも言える論理性・感性のかたちを追いながら明らかにし、後期ロマン主義者としてのペイター像を描き出した。
26. 人の顔、風景の顔	単	2004年09月	日本ハーディ協会編『日本ハーディ協会ニュース』、第56号：１－２.	トマス・ハーディの小説（たとえば『帰郷』や『テス』）には、人の顔の描写においてその人物の経歴が刻みこまれて描かれているとともに、自然風景にも擬人的に人の顔のように描写されることが多く、その意味に注目すべきことを示唆した。
27. ファッショナブル・ノヴェルの世界	単	2004年09月	『別冊解説：*Regency Dandyism and the Fashinable Novel*, ed. Masaie Matsumura and Akira Tamai』、Hon-no-Tomosha, pp. 12-22.	「ファッショナブル・ノヴェル（社交界小説）」の全般的特徴を描写したうえで、この派の小説の代表的な作家たちの横顔を紹介し、これらの小説を研究するための基本的文献・資料について解説を加えた。
28.『まじめが肝心』とファルス――ワイルド論　（査読付）	単	2004年02月	小森陽一・富山太佳夫・沼野充義・兵頭裕己・松浦寿輝編『岩波講座文学』、第5巻『演劇とパフォーマンス』、岩波書店、pp. 227-47.	オスカー・ワイルドの傑作『まじめが肝心』をファルス（笑劇）的喜劇と位置づけ、この慣習性を逸脱した異質な特質を、この劇テクストそれ自体がもっているグラマーないしはロジックに基づいて分析し、劇テクストとしての新しい可能性を掘り起こすことを試みた。結論として、ワイルドが「ファルス」を見直す動機を秘めている面を明らかにした。
29. ワイルド研究の現在（査読付）	単	2003年11月	日本ワイルド協会『オスカー・ワイルド研究』、第5号：１３－１６.	1990年以降のワイルド研究の動向は、ワイルドを取り巻く文化・歴史・政治的コンテクストを重視する見方と、ワイルドについてのジェンダー的およびセクシュアリティ的研究とに２分される傾向にあることを指摘した。このような研究傾向に目を配りつつも、そのなかにあって、テクスト主体の研究がなおざりにされる陥穽について注意を喚起した。
30. J．ヒリス・ミラーの批評――テクストの「異種混交性」をめぐって　（査読付）	単	2002年10月	石田久編『ドラマティック・アメリカ』、英宝社、pp. 3-21.	ミラーの批評的立場の変遷について、ニュー・クリティシズムから、G・ブーレ流の意識の批評、脱構築批評（ディコンストラクション）、文化批評に至るまでの軌跡を跡づけ、そのなかで、文学テクストおよび言語それ自体における「異種混交性」への執拗な関心が、批評家ミラーの大きな特質として、一貫して窺えることを明らかにした。
31. 批評理論の教え方――批評理論の多様性とコミットメントのはざまで（査読付）	単	2002年10月	『英語青年』（研究社）、２００２年１０月号：６－７.	批評理論を教室で教える場合の問題点について、デイヴィッド・ロッジらの英米の批評理論を例に挙げて紹介するなかで、論者自身の経験をも踏まえて、批評理論教育で注意すべき点、有益な点について私見を述べた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
32.トマス・ハーディを読むＪ．ヒリス・ミラー　（査読付）	単	2001年11月	『英語青年』（研究社）、２００１年１１月号：１４－１６，４８．	批評家ヒリス・ミラーが終始一貫して関心を持ち続けていた「言語の透明性への懐疑」、「文学テクストの調和的統一性への不信」は、ハーディ文学を愛読し、その文学作品を分析する論文・研究書からも検証できることを明らかにした。
33.ワイルドにおける文学の再生――無数の生と遺伝　（査読付）	単	2001年02月	『英語青年』（研究社）、２００１年２月号：１７－１９．	ワイルドは、人間とは無数の生と無数の感覚を有し、思想と情念の異様な遺産をみずからの中に内蔵していると述べるように、「主体」を単一的なものとは見ず、遺伝的発想にもとづいて、複合的存在と考える。この「生（life）」の異種混交性を前提とする思想は、ワイルドが登場人物を造形する場合や文学観を展開する際に、その基盤を形成するものとして表されていることを指摘した。
34.アーノルドの批評（査読付）	単	2000年03月	『英語・英米文学のエートスとパトス――杉本龍太郎教授古稀記念論文集』（同論文集刊行会編）、大阪教育図書、pp. 399-407.	マシュー・アーノルドは、文学的営みを形づくるものとして創造能力と批評能力の二つの能力を提起し、従来の英文学の批評史を修正するほどに批評能力の重要性を強調した。このアーノルドの批評のもつ今日的意味を、後輩のワイルドとT. S.エリオットの批評と関係付けて考察した。
35.近代性と言葉――吉田健一のペイター論（査読付）	単	2000年02月	『藤井治彦教授退官記念論文集』（同論文集刊行会編）、英宝社、pp. 513-24.	批評家としての吉田健一は、ワイルドには近代性に見合った文体を創造した文学者として注目するのに対して、ペイターの文体については近代性を確立できていないものと判断を下す。吉田のこの視点から、ペイター自身が文体の近代性を求めることを若い後輩たちに唱導しながら、みずからはそれを実践できていない面をもっていたという過渡期の文学者像を確認することができる。さらに、吉田のペイター論は、ペイターの屈折の多い文体を近代の複雑性をあるがままに追う文体として認識しており、ペイターの言語の特質を捉えるための視角を提示した論として高く評価できると結論づけた。
36.『サロメ』とヴィクトリア朝　（査読付）	単	1999年11月	松村昌家教授古稀記念論文集刊行会編『ヴィクトリア朝――文学・文化・歴史』、英宝社、pp. 266-80.	ワイルドの『サロメ』においては、言語テクストと映像テクスト（ビアズリーの挿絵）が、特に男女の欲望の表象、さらには慣習的なセクシュアリティの揺らぎをめぐって、あい対立する磁場が出来していることを指摘し、ここにヴィクトリア後期の特異な「テクスト」の登場を指摘し、その意味を考察した。
37.ペイターと吉田健一	単	1998年10月	日本ペイター協会編『日本ペイター協会会報』、第１９号：１２－１５．	ペイターと吉田健一のそれぞれの文学観において、近代性をめぐって呼応しあっている側面があることを明らかにし、その意味を考察した。
38.ペイター文学と現代批評　（査読付）	単	1997年05月	『言語と文化の対話』（齋藤俊雄・大谷泰照両教授退官記念論文集刊行会編）、英宝社、pp. 334-43.	ペイター文学が、１９７０年代以降に起こってきた現代批評理論の流派の１つ、ディコンストラクション（脱構築批評）の批評を受け入れる特質を持っていたことを明らかにした。
39.快楽のゆくえ――『真面目が肝心』（査読付）	単	1997年02月	富山太佳夫編『ディコンストラクション――＜現代批評のプラクティス＞１』、研究社、pp. 173-99.	ワイルド喜劇の代表作である『真面目が肝心』は快楽原理の肯定、欲望充足の貫徹というテーマを中心とする劇であることを論証した。この欲望（プレジャー）の充足が、結婚という慣習的制度と「バンベリング」という反慣習的・反社会的制度とが相対立するそれぞれの次元において実現する展開のなかに、この劇のもっともラディカルな特質が潜んでいることを明らかにした。
40.ペイターと＜透明性＞　（査読付）	単	1996年04月	『言語と文化の諸相――奥田博之教授退官記念論文集』（同論文集刊行会編）、英宝社、pp.227-34.	ペイターのエッセイ「透明性論」は難解なものとしてさまざまな解釈を呼んできたが、この「透明性」への希求とその正反対のモナ・リザ像に象徴される「不透明性」とを対照させて、ペイターのヴィジョンのありようを考察することにより、この「水晶的性格」がペイターの人物造型にまで深く浸透している事実を明らかにした。
41.ヴィジョンのなかのローマ――『享楽主	単	1995年10月	森晴秀編『風景の修辞学（エコリ	『享楽主義者マリウス』の主人公マリウスが初めて見たローマの風景は、過去の歴史が積み重ねられたパリンプセストと評することの

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
義者マリウス』（査読付）			チュール）』、英宝社、pp. 187-218.	できる風景であった事実を指摘したうえで、こうしたありようの風景は「聖チェチリア」の地下墓地にも通底し、結果的にはこの小説の物語空間の重要な特質を形成するものであることを明らかにした。さらに、このようなパリンプセスト的風景のなかに浮上する「白」の風景とその「白」の表象する世界こそ、ペイターが捉えようとした究極のヴィジョンであると主張した。
42.絵画空間のなかの音楽――「ジョルジョーネ派論」再考（査読付）	単	1995年07月	日本ペイター協会編『ウォルター・ペイターの世界――ペイター没後百年記念論文集』、八潮出版社、pp. 123-42.	ペイターが「ジョルジョーネ派論」のなかで提起した有名なテーゼ「あらゆる芸術は音楽の状態をあこがれる」は、幾つかの問題を含んでいる。ペイターの「音楽」をめぐる言説は、理念を表わす隠喩としての音楽から、ジョルジョーネ派画家の実際の絵画作品に描かれている主題としての音楽に至るまで、複雑な揺れを見せる。これらの点に注目をして、ペイター文学における「音楽」の意味を考察した。
43.Pater とWilde ――'the literary architecture' をめぐって　（査読付）	単	1994年12月	『英語青年』（研究社）、１９９４年１２月号：１７－１９.	ペイターが理想の文体像を語る際に建築的比喩を使用した点にペイターの文体観の特質が表われていることを指摘し、さらにワイルドによるペイターの文体のモザイク性についての「批判」を対照させることにより、ペイターの文体観が孕んでいる現代的意味について考察した。
44.＜ありのままの事実＞と＜芸術の制約＞――ラスキンとペイターの詩学をめぐって　（査読付）	単	1992年10月	内多毅監修、深澤俊・杉本龍太郎・内田能嗣編『イギリス文学展望――ルネサンスから現代まで』、山口書店、pp. 435-59.	ラスキンは「ありのままの事実」を追求し、ペイターは「ありのままの印象」を追求したという、２人の文学者の相違面と類似面の両面を比較対照しながら、１９世紀ヴィクトリア朝の文学的・芸術的慣習を打破して新しい詩学を模索する、ラスキンとペイターのすがたを明らかにした。
45.＜芸術家と市民の対立＞のモチーフのゆくえ――『恋の霊』論ノート	単	1992年09月	日本ハーディ協会編『日本ハーディ協会ニュース』、第３２号：２－４.	ハーディ文学において、１９世紀末に始まり、２０世紀に入って顕著となるというモチーフがいかに展開しているかを念頭において、ハーディ最後の長編小説『恋の霊』においてこのモチーフの存在のありようを考察した。
46.*The Well-Beloved* における 'ending'（査読付）	単	1992年07月	『成田義光教授還暦祝賀記念論文集』（同論文集刊行会編）、英宝社、pp. 69-83.	ハーディの実質上の最後の小説といえる『恋の霊』を取り上げ、その結末の多義性を考察した。ここに、芸術原理と市民原理の二つが露呈し、相互に対立していることがこの小説のending の特質を形成している事実を明らかにした。
47.『サロメ』における「欲望」	単	1991年12月	日本ワイルド協会編『ワイルド協会ニューズレター』、第８号：１０－１１.	『サロメ』の女主人公サロメがヨカナーンに向ける欲望を表象する言葉を綿密に分析し、その特質としてフェティシズム性という特質を指摘した。
48.『享楽主義者マリウス』におけるインターテクチュアリティとその時間制（査読付）	単	1989年12月	『待兼山論叢（文学編）』（大阪大学文学部）、第２３号：１－１４.	ペイターのこの長編小説の物語空間にあっては、他の幾つかの文学テクストからの引用やそれらのテクストへの言及が多数見られ、ここにインターテクチュアリティ（間テクスト性）の空間ができあがっていることを、まず指摘した。これらの引用される異テクストは、本質的に時間性を帯びていて、多次元に及んでいるため、ここに時間性が層を成して堆積する物語空間ができあがる。このような単一性を排除した、多層を形成する物語空間こそ、この小説の特質であると結論づけた。
49.ワイルドとホイッスラー――詩と絵画の領分をめぐって	単	1989年07月	日本ワイルド協会編『日本ワイルド協会ニューズレター』、第６号：１０－１２.	１９世紀末のイギリスにおいて、ヴィクトリア朝の物語絵画のような文学と絵画が一つになった芸術を否定し、芸術の中のそれぞれのジャンルがもっている固有性を強調する考え方が現れてきた。ワイルドとホイッスラーはそのような芸術家の代表として、２人の芸術観の類似性について考察した。
50.『家のなかの子供』における旅立ち（査読付）	単	1988年11月	内多毅監修、杉本龍太郎・内田能嗣編『イギリス文学評論、III』、創元社、pp. 167-80.	この小説の主人公の旅立ちのありようを分析し、この小説空間にあっては、無垢を象徴する「白」の世界は「赤」によって象徴される経験の世界を経たあとで獲得できるものであるという、ペイター独特の世界観が窺えることを論じた。
51.ワイルドの＜純粋・	単	1988年7月	日本ワイルド協会	オスカー・ワイルドがみずから確立した自立的芸術という発想に

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
自立＞文学観――ラスキンとペイターのあいだで			編『日本ワイルド協会ニューズレター』、第５号：１５－１７．	は、ウォルター・ペイターとジョン・ラスキンとの親密な関係が見られるが、ペイターが芸術の自立性を堅守するのに対し、ラスキンが社会や道徳とのつながりを重視する傾向が強いという点から判断すると、ワイルドはあい反する２つの芸術観のあいだにはさまれていたと言えよう。この芸術姿勢に対してどのような対処をするかが、ワイルド文学の永遠の課題であって、それがワイルド文学の興味深い特質を形成している。
52.ダンディの求愛（査読付）	単	1987年12月	『イギリスの表層と深層――英米文学の視点から：内多毅博士喜寿記念論文集』（同記念論文集刊行会編）、東海大学出版会、pp. 220-28.	ワイルドの劇作品に登場するダンディ型の人物のもつ意味を考察したもの。劇空間において圧倒的な信頼を観客から獲得する存在であるダンディが、こと求愛に臨んでは女性たちに翻弄されるという叙述がされている面にワイルド喜劇の特徴を指摘し、ここに複眼的ヴィションの提示を試みるワイルドの文学観を探った。
53.社交界の劇空間――『つまらぬ女』を中心に　（査読付）	単	1987年12月	藤井治彦編『空間と英米文学』、英宝社、pp. 141-72.	ワイルドの喜劇『つまらぬ女』を取り上げ、この劇空間に表象される社交界がもっている、周縁に対する中心としての文化的意味を明らかにし、そのうえで、この社交界が田舎・田園と対置されて描かれる劇空間のもつ意味を考察した。
54.＜不在＞のエロティックス　（査読付）	単	1987年10月	内多毅監修、杉本龍太郎・深澤俊・内田能嗣編『愛と死――エロスのゆくえ』、創元社、pp. 151-65.	エッセイ「ヴィンケルマン論」、「ダ・ヴィンチ論」を中心にして検証し、ペイターのエロティックスの特質として、官能性を不在のかたちで表象する点に窺えることを指摘した。
55.『獄中記』と『レディング監獄の唄』における語り	単	1986年07月	日本ワイルド協会編『日本ワイルド協会ニューズレター』、第３号：１５－１６．	ワイルドの長編書簡『獄中記』とバラッド詩『レディングング監獄の唄』には、従来あまり指摘されなかった語りの機能が十分に発揮されていることを検証した。
56.『ドリアン・グレイの肖像』における図柄　（査読付）	単	1986年4月	内多毅監修、杉本龍太郎・内田能嗣編『イギリス文学評論、Ｉ』、創元社、pp. 151-87.	ワイルドのこの長編小説においては、この物語空間が多義性を孕んでいる事実を指摘したうえで、それには読者の視線をコントロールする力学が絡んでいて、３人の登場人物をめぐって浮上する「図柄」と背景に退く「地」との関係がひとつの装置として設定されていることを指摘した。このために、図柄が反転することによって多義性が生じることを明らかにした。
57.社交界のトポス――ワイルド喜劇論ノート　（査読付）	単	1984年08月	『都市史をめぐる諸問題――共同研究論集』、第２輯、大阪大学文学部、pp. 71-82.	ワイルドの喜劇作品の劇空間の重要な特徴として、「社交界」が導入されていることをテクスト分析を通して明らかにし、この「社交界」の文化的意味を考察した。
58.ワイルドの批評とホイッスラー　（査読付）	単	1981年04月	『山川鴻三教授退官記念論文集』（同記念論文集刊行会編）、英宝社、pp. 317-31.	ワイルドの批評の特質として芸術ジャンルの固有性を主張する考え方が指摘できるが、この芸術観の発展にはホイッスラーの芸術観が深く関わっていることを明らかにした。さらに、２人のあいだには相互の芸術観をめぐってアンビヴァレントな関係が横たわっていたことを種々の資料を踏まえて検証し、この関係がワイルドの批評論に微妙な影を落としていることを主張した。
59.『獄中記』・その他――ワイルドの主要作品解題	単	1980年09月	『ユリイカ』（青土社）、１９８０年９月号：２３０－３５．	ワイルドの『獄中記』、童話、『レディング監獄の唄』は、アポロに向かって笛吹きの腕比べを挑んで敗れた敗残者・マルシュアスが歌う歌であると呼ぶことができる根拠を明らかにした。そして、ワイルドの文学世界は、アポロの歌とこのマルシュアスの歌との二重唱からなっていることを主張した。
60.オスカー・ワイルド『理想の夫』の構成（査読付）	単	1979年06月	『英米文学――研究と鑑賞』（大阪府立大学英米文学研究会編）、第２３号：４４－７８．	主人公のチルターン夫妻とダンディのゴーリング卿がそれぞれ別個の世界観を表わすというこの喜劇のドラマツルギーのなかに、複眼的ヴィジョンの提示をめざすモチーフが潜在することを明らかにした。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
61.『ウインダミア夫人の扇』における＜ドラマティック・アイロニー＞について（査読付）	単	1979年5月	『経済理論』（和歌山大学経済学部）、第１６９号：３７－６２．	ワイルドの喜劇『ウインダミア夫人の扇』にあっては、アーリン夫人をめぐる「真相」について、同夫人と観客だけが知っていて、他の登場人物たちは無知の状態に置かれているという、大掛かりなドラマティック・アイロニーが設定されている。この装置を詳細に分析し、その意味を考察し、ここに「認識」のドラマを志向する、きわめて現代演劇的なモチーフが窺えることを指摘した。
62.アーサー・シモンズと象徴主義――マラルメの＜氷結した不浸透性＞をめぐって（査読付）	単	1975年03月	『大阪府立大学紀要（人文・社会科学』（大阪府立大学）、第２３号：１７－３６．	イギリス世紀末の批評家シモンズの代表的批評書である『文学における象徴主義運動』に収録されている「マラルメ論」に注目をし、シモンズがステファヌ・マラルメに心酔しながらどこか警戒的であるという、あい反する２つの面が見られることの意味を考察した。結局、マラルメの難解な詩的言語の世界を「氷結した不浸透性」と呼ばざるをえなかったように、伝達不能で、非個人的な詩はシモンズの容認できるものではなかった。ここに、マラルメを、後世のT. S. エリオットの個性否定の詩学に通じるような先駆者として高く評価しながら、個性の存在を否定できないシモンズについて、過渡期の批評家と見ることができると結論づけた。
63.Arthur Symons と Decadence （査読付）	単	1974年04月	『村上至孝教授退官記念論文集』（英宝社）、pp. 282-96.	イギリス世紀末の批評家アーサー・シモンズが、批評家として出発した時点においては「デカダンス」の文学に没頭していたが、そののち、「象徴主義」の文学へと転換していく過程を検証することにより、この二つの文学のあいだの共通面と差異性が世紀末文学においてもっていた意味を考察した。
64.アーサー・シモンズにおける象徴主義――不安感から象徴主義へ	単	1972年10月	*Osaka Literary Review*（大阪大学大学院英文学談話会編）、第１１号：８９－９９．	シモンズが象徴主義に惹かれていった根拠として、イギリスの世紀末文学特有の詩人における内面の不安が想定されることを明らかにした。
65.『ドリアン・グレイの肖像』論――ワイルドのゆれ動く自己	単	1971年10月	*Osaka Literary Review*（大阪大学大学院英文学談話会編）、第１０号：１０５－２０．	主人公ドリアンがこの小説の物語空間の全体において表象する人間存在にあっては、ある一つの固定的な世界観に基づいて行動することが禁じられているように見える。これには世紀末というさまざまな価値観が複雑に絡み合う時代に生きた作者ワイルドのゆれ動く自己が関与していることをテクスト分析を通して明らかにした。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
1.「文章読本」から学ぶ読解力と表現力	単	2022年12月24日	武庫川女子大学言語文化研究所主催、大学間教育研究連携プロジェクト２０２２年度言語文化研究所フォーラム：「言語文化と言語教育――文章読本から学ぶ――」	AI（人工知能）の時代を迎えて、われわれの言語（国語）能力において重要なのは、読解力なのか表現力なのか。この究極の問題を、教科書を読めない子供たちの増えている状況に鑑み、AIの言語力との対比において考察した新井紀子氏の論を踏まえて、考えてみた。そして、AIに対抗できる国語力を鍛えるには、谷崎潤一郎や向井敏の「文章読本」が有益なヒントを与えてくれることを示唆した。
2.『文章読本』の系譜	単	2021年12月25日	武庫川女子大学言語文化研究所主催、大学間教育研究連携プロジェクト２０２１年度言語文化研究所フォーラム：「言語文化と言語教育――文章読本を考える――」	『文章読本』の系譜の輪郭を明らかにして、その意味を考察した（谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫、丸谷才一、井上ひさし、向井敏、斎藤美奈子、等）。その上で、谷崎潤一郎がみずからの『文章読本』において、実用的な文章と芸術的な文章との区別がないと主張した論に注目し、現代の高校国語教科書をめぐる議論との関わりについて考察した。
3.ホイッスラーと世紀末文学の詩学――ワイルド、ペイター、シモンズ	単	2021年12月11日	日本ワイルド協会第４６回大会	イギリス世紀末文学の詩学の本質を、世紀末の文学者たちが実践した（Art-Criticism）の検証をとおして明らかにしようとした。 J・A・M・ホイッスラーの絵画論に窺える「逸話性から解放された自立的色彩空間としての絵画」という発想が、ジョン・ラスキン、ウォルター・ペイター、オスカー・ワイルド、アーサー・シモン

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
１．学会ゲストスピーカー				
				ズ、ヘンリー・ジェイムズの絵画論とどのように関わっているかを検証し、文学論と絵画論が相同的に存在することを明らかにして、世紀末文学の詩学について考察した。
4.ラフカディオ・ハーンと浦島伝説	単	2021年7月24日	武庫川女子大学言語文化研究所主催「言語文化セミナー」	ラフカディ・ハーン（小泉八雲）が日本のおとぎ話のなかで一番魅了されたものと伝えられており、また、自ら書き著わしている「浦島太郎の物語」を取りあげ、ハーンの独自な解釈を検討し、その意味を考察した。その考察にあたっては、日本における浦島伝説のさまざまなかたちを検証し、また、万葉集の浦島物語や、英国の日本学者チェンバレンや太宰治らの浦島物語と比較対照してそのあいだの異同を明らかにし、また中西進や犬養孝らの万葉集学者の解釈にも言及し、比較文学的観点から考察を行った。
5.トマス・カーライルの「衣装哲学」――１９世紀英国におけるダンディズムの流行	単	2020年12月19日	武庫川女子大学生活美学研究所　甲子プロジェクト第２回研究会	講演。 イギリス１９世紀の思想家トマス・カーライルの著作『衣装哲学』を取り上げ、その思想の輪郭の把握とその意味を考察し、日本の代表的な建築家・遠藤新への影響関係を探った。カーライルは、森羅万象を衣装の比喩でとらえ、その中における本質的なるものを求める思想を展開する。カーライルは、当時のイギリスにおいて流行していたダンディズムを軽薄な表層的なるものと批判したが、その深層に横たわる精神性はフランスの文学者たちを経過してやがて世紀末のイギリスに復活する流れを解明し、２０世紀および現代における、表層性を重視する文化への方向性を検討した。
6.ラフカディオ・ハーンと浦島伝説	単	2020年01月17日	佛教大学文学部講演会	Lafcadio Hearn （小泉八雲）は、来日後２作目の著作『東の国から』(1895) において発表したエッセイ「夏の日の夢」の中で、日本のお伽話「浦島太郎物語」を自らの解釈にもとづいて書き記している。ハーンは、何故、浦島伝説に惹かれたのか、従来の浦島伝説とは異なる描写の側面を明らかにすることにより、その理由を考察し、ハーンの日本文化理解の特質、およびハーン文学の秘めた特質に迫ることをめざした。
7.ローマの表象――『ミドルマーチ』、『ある婦人の肖像』、『享楽主義者マリウス』	単	2018年12月08日	日本ジョージ・エリオット協会、第２２回全国大会（於、大谷大学）	イタリアの古代都市ローマが主人公の精神的世界にとってどんな意味をもっていたのか、また主人公の精神的発展においてどのような役割を果たしたのか、それぞれの小説において検証してみた。 ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』のドロシア、ヘンリー・ジェイムズ『ある婦人の肖像』のイザベル・アーチャー、ウォルター・ペイター『享楽主義者マリウス』のマリウス――これらの主人公における「ローマ経験」を相互に比較・検証するなかで、ドロシアの「ローマ経験」の意味を考えてみた。
8.カズオ・イシグロの世界――『浮世の画家』と『日の名残り』における「励む姿」の映像	単	2018年04月21日	芦屋市国際交流協会（潮芦屋文学セミナー）	イシグロの小説作品の中から、日本人を主人公にした第２作『浮世の画家』と、イギリス人を主人公とする第３作『日の名残り』を取り上げ、主人公たちは、特権階級ではなく普通の人でありながら、過去の時代の負の遺産を背負いつつも、与えられた条件の中で、無償・徒労あるいは滑稽と思えるほどに、何かに励んでいる姿に注目した。この「励む姿」こそ、イシグロの脳裏に浮かんだ基本的な人間存在の像ではないのか。取り上げた２つの小説を結ぶ特質を明らかにしつつ、イシグロ文学の中心的なるものを探った。
9.ハーディにおけるリアリズム小説とその逸脱――『ラッパ隊長』を中心に	単	2017年11月11日	日本ハーディ協会第６０回大会	トマス・ハーディの小説は、リアリズム小説でありながら、偶然の一致と称される展開がプロットの欠点としてよく指摘される。この特質を、リアリズム小説の枠組みからの逸脱と捉えたい。ここにハーディ小説が孕む問題性と、一般にヴィクトリア朝リアリズム小説が抱えていた難題が窺えることを明らかにした。すなわち、リアリズム小説は、リアルなる事と物の記述を執拗に求めれば、その先には退屈・単調が待ち構えている。このリアリズム小説のアポリアへの挑戦がハーディ、およびヴィクトリア朝小説家の課題であったことを主張した。
10.ジョン・ラスキンのピクチャレスク観から見るオースティンのピクチャレスク風景	単	2017年06月24日	日本オースティン協会第11回大会	ラスキンが*Modern Painters*, Vol. IV (1856)において画家ターナーのピクチャレスク風景を論じた時、ピクチャレスクにはnoble なものとsufaceなものの２種類があることを明らかにした。このラスキンの説を踏まえて、オースティン小説に現れたピクチャレスク風景を検討すれば、どんな意味が見えてくるのか、考察した。１９世紀初頭のオースティン小説とヴィクトリア朝中期の美学論との間の文

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
１．学会ゲストスピーカー				
				学的架橋の可能性を探る試みである。 結論として、オースティンにあっては、イギリスの田園への愛着が一貫して見られつつも、後期の小説になるにしたがって、ラスキンの提唱するnoble なピクチャレスク観に近い、風景観への深化が見られる傾向を指摘した。
11.ワイルド文学のなかのジャポニスム	単	2016年01月23日	横浜市立大学：エクステンション講座「時代のなかの作家たち」（横浜市立大学地域貢献センター主催、横浜市政策局後援）	オスカー・ワイルドの劇『サロメ』（１８９４）とこの作品に付けられたオーブリー・ビアズリーのイラストレーションを比較検討することにより、ワイルドを中心とするイギリス１９世紀末の文学・文化のなかに「ジャポニスム（日本趣味）」が鮮やかに浸透しているありようを明らかにした。特に、日本の浮世絵の美人画に描かれる着物、化粧の場面、孔雀の模様に注目し、ビアズリーへの影響関係を検証した。
12.イギリス世紀末文学とリアリズム	単	2015年11月01日	日本英文学会北海道支部第６０会大会	イギリス世紀末文学はヴィクトリア朝の伝統的な小説において展開したリアリズムをどのように継承し、またリアリズムに反発してリアリズムの孕む問題を克服しようとしたのか。ファンタジー、フェアリー・テイル、心理学的ロマンス、冒険小説、探偵小説、ＳＦ小説等の、従来の本格的な小説からみれば「サブ・ジャンル」といえる物語作品が出現してきた時代にあって、この文学現象とリアリズム文学との相互関係を考えてみた。特に、オスカー・ワイルドの「虚言の衰退」において反リアリズムの文学観を検証して、「反・事実」の詩学を確認し、その上で『ドリアン・グレイの肖像』を「フェアリー・テイル」のパロディとして見る読みを提示し、リアリズムから新しく脱皮した文学としての可能性について考察した。
13.*The Trumpet-Major* をどう読むべきか	単	2015年07月18日	九州トマス・ハーディ研究会（２０１５年度講演会）	ハーディの唯一の歴史小説『ラッパ隊長』（１８８０）は、ハーディの他の長編小説と比較されると、従来、高い評価を得ていない。その理由は、小説としての捉えがたい特質にあるのではないかと考えられる。この特質を解明することにより、この歴史小説の新しい読み直しを図った。その注目すべき特徴とは、語りの空間に設置されたドラマティック・アイロニーとも称すべき構造であって、全知の語り手はこの構造の提示する視角に依存して、本来のコメント機能を物語世界に対して発揮していない点を示唆した。
14.『クランフォード』を読むJ・ヒリス・ミラーを読む	単	2012年10月06日	日本ギャスケル協会第２４回大会	ギャスケルの代表小説『クランフォード』について、現代の脱構築派の批評家J・ヒリス・ミラーはペイターの小説「ピカルディのアポロン」と比較対照することによりその今日的意味に注目している。ミラーのこの着眼点を検証することにより、小説における多義的言語空間の現出とその意味について考察した。
15.イギリス世紀末文学の面白さ	単	2010年02月	大阪大学定年退職記念最終講義（大阪大学文学部主催）	世紀末文学の詩学のもっとも究極的な原理がウォルター・ペイターに代表されていると見て、なかでも『享楽主義者マリウス』、『ルネサンス』等のテクストに頻出する「黄金の書」というモチーフはその原理の典型的なものであるとして指摘した。このモチーフは、ワイルドでは「毒として書物」という逆説的な形をとり、それはＷ．Ｂ．イエイツにまで継承されるが、ここには、自然や現実ではなく、書物という文化的構築物が文学創造に大きな意味を持つことが示唆されている。イギリス世紀末にあって、文学の再生を希求する態度は、文学から文学を創るという旧くて新しい詩学に基づいているのではあるまいか、と述べた。
16.博士課程における教育と研究	単	2010年02月	熊本県立大学大学院文学研究科博士後期課程開設記念シンポジウム（特別講演会、熊本県立大学文学部主催）	博士後期課程で英語英米文学を専攻する学生について、博士論文の完成に至るまでの研究指導においては、指導教員と学生の間で相談のうえ、指導計画表（ロードマップ）の作成が特に重要であることを述べた。さらに、学生の研究指導にあたっては、単独の指導教員による指導にのみ依存するのではなく、複数の指導教員を交えた公開研究発表会や学会発表のリハーサル等を行うことの意味について私見を述べた。
17.世紀末文学とは何か	単	2009年11月	阪大英文学会第４２回大会（大阪大学文学部）	ラスキン、ペイター、ワイルドらの世紀末の文学者を、先行のヴィクトリア朝文学と後行のモダニズム文学との比較において検討したうえで、世紀末の文学者の認識構造においては、ものそれ自体ではなくて、ものについての意識のほうに関心の移行と傾斜が生じている点を指摘し、この新しい認識が世紀末文学の詩学(poetics) を形成している事実を明らかにした。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
１．学会ゲストスピーカー				
18.イギリス世紀末文学と言語意識	単	2009年10月	日本英文学会中部支部第６１回大会	世紀末文学者の言語意識において、ヴィクトリア朝のリアリズム文学における圧倒的な「ファクト」の圧迫に対峙して、「ファクトそのもの」ではなくて、むしろ「ファクトについての意識」を追い求める姿勢が表れていることを指摘し、ここに世紀末文学の詩学を考えるうえで重要なモチーフが存在することを示唆した。
19.『嵐が丘』の新しい読みの可能性	単	2008年06月	日本ブロンテ協会バラクラ講演会（蓼科バラクラ・イングリッシュ・ガーデンにて）	『嵐が丘』のエンディングにおけるエドガー、キャサリン、ヒースクリフの３基の墓の配列の意味について考察し、同時代の英・米・仏のadultery novel （ホーソーン『緋文字』、フローベール『ボバリー夫人』など）を念頭において、セクシュアリティをめぐる新しい認識・倫理規範を読みこむことの可能性について述べた。
20.シャーロット文学の可能性――『シャーリー』の場合	単	2007年10月	日本ブロンテ協会２００７年度大会	シャーロット・ブロンテの『シャーリー』のなかには、シャーロット小説のもつ問題点、つまり女性の自立を求める思想の表明と物語構築への意思との葛藤が露呈していて、この小説への低い評価につながっていると思われるが、この欠点と考えられる面にこそシャーロット小説の可能性が潜んでいることを示唆した。
21.ペイター文学の可能性	単	2007年10月	日本ペイター協会第４６回大会	ペイター文学の特質について、オリジナル・ファクト、ファクトとファクトについての感覚、ヴァージニア・ウルフの「印象」、「ドニ・ローセルロワ」におけるファクトと印象、ラスキンとアーノルドにおけるファクト、等の観点から考察を行い、ペイターの「詩学」を探った。
22.世紀末文学と身体	単	2004年11月	京都女子大学英文科公開講座	イギリス１９世紀末における文学と美術の特徴を検討すると、言語テクストに窺える表層性が映像テクストの肌理と想像以上に呼応している現象を明らかにし、世紀末の文学者が日本の美術工芸品に見られる装飾的空間に魅了された根拠について論じた。イギリス世紀末文学とジャポニスムとの関係性についての考察。
23.オスカー・ワイルド『サロメ」』の魅力――言葉と映像の創る世界	単	2004年07月	愛知淑徳大学平成１６年度第２回文学部講演会（英文科主催）	『サロメ』という劇について、そのセリフを綿密に検討すると、言葉の特性を極限にまで活用しつつ、映像的側面をも併せ持っていることを明らかにした。ビアズリーがイラストレーションによって映像的要素を過剰に付加したが、そうした映像的関心を誘発する契機が、言語テクストとしての『サロメ』に潜在していることを示唆した。
24.ブロンテ小説の楽しみ方	単	2003年07月	福岡女子大学平成１５年度英文学会	ブロンテ３姉妹の代表作をとりあげ、女性の自立と職業、グローバルな視野を孕む物語空間、インテリ女性とガヴァネス、等々、ブロンテ小説の世界には今日的なテーマを数多く発見できることを示唆した。
25.『ヴィレット』のダブル・エンディングを考える	単	2003年07月	日本ブロンテ協会関西支部夏季大会	シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』は、女性主人公ルーシーの婚約相手ポールがカリブ海に所有するプランテーションを営む島から無事帰国したのか、船が難破して死したのか、決定的なことが明らかにされないまま終わる。テクストを綿密に検討してみると、このポールの「島」に歓楽の島のイメージが重ねられ、しかもこの「男性性」が去勢される叙述が潜伏していると読める面があって、この特質がエンディングの多義性に関わっているのではないかと、示唆した。
26.ワイルド文学の魅力――批評	単	2002年09月	南山大学２００２年度英文学会	ワイルド文学の魅力は、どの作品、どのジャンルに存在するのか、意見がさまざまに割れることがあるにしても、「批評」がその特異性において敬遠できないものであることに異論はないと思われる。このワイルドの批評の魅力を、今日のポスト構造主義の批評、特に脱構築批評から読み直すと、一層その魅力が拡大することを例証した。
27.Ｊ．ヒリス・ミラーの批評再考――ハーディの詩「引き裂かれた手紙」をめぐって	単	2002年08月	テクスト研究学会第２回大会	トマス・ハーディの詩「引き裂かれた手紙」をヒリス・ミラーが脱構築のフランスの批評家デリダを援用して、この詩のもつ決定的意味の把握の不能性を論じている。この「論じられる」ハーディと「論じる」ヒリス・ミラーとの間に窺える不思議な親密性を解き明かすことにより、批評行為における新たな魅力の存在を示唆した。
28.日英比較における世紀末文化論	単	2001年11月	大阪成蹊女子短期大学英文科秋季講演会	イギリス世紀末の文学と美術の世界において、ジャポニスム（日本趣味）と呼ばれる日本文化への関心が色濃く反映されていることを明らかにし、日英相互の文化的交流の重要な一面を明らかにした。
29.ワイルド喜劇の可能性	単	2001年09月	名古屋大学２００１年度英文学会	ワイルドの喜劇『真面目が肝心』を取り上げ、この劇が文化的記号論の観点からの分析に耐えうる特質をもっていることに触れたうえ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
１．学会ゲストスピーカー				
				で、この特質が、静的な描出に陥ることなく、人間存在の深層を形成する「欲」の世界（物質的欲望、性的欲望、政治的欲望など）の衝動を巧みにドラマツルギー化した動的な構造に支えられていることを明らかにした。
30.新しい批評理論の功罪――ヒリス・ミラーの批評を批評する	単	2001年08月	テクスト研究学会第１回設立大会	『小説と反復――七つのイギリス小説』に代表されるＪ．ヒリス・ミラーの批評を、ニュー・クリティシズムから出発して、意識の批評を経て、脱構築批評に辿りついた批評的遍歴を検証することを通して、ミラーが一貫して言葉にこだわっている姿勢を評価し、そこに内在的な文学的動機が存在していることを示唆した。
31.『嵐が丘』を読む	単	1996年07月	日本ブロンテ協会関西支部大会	『嵐が丘』の読み方について、最近、ポストコロニアル批評の立場から新鮮な研究が現れている状況について紹介を行い、このような読みの功罪について述べた。
32.オスカー・ワイルドと世紀末芸術	単	1992年06月	大阪大谷大学１９９２年度英文学会	ワイルド文学の特徴として、芸術の他のジャンル、とくに美術の世界との関わりが深い点を指摘し、ビアズリーに代表されるイラストレーションやアール・ヌーボーとのつながりを考察した。
２．学会発表				
1.文学作品における登場人物のネーミング	単	2020年02月14日	武庫川学院創立８０周年記念シンポジウム「ネーミングの言語文化」（武庫川女子大学言語文化研究所主催）。	シンポジウムの司会と講師。 本シンポジウムは、言文研の研究員の全員（９名）によるもの。 玉井暲は、ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』を基にして、人名のネーミングは、意味・本質・性格を表す型と、無意味的・恣意的・慣習的な命名の型の２つの型があることを述べたあと、ヘンリー・ジェイムズ「『象牙の塔』創作ノート」、チャールズ・ディケンズ『互いの友』、オスカー・ワイルド『まじめが肝心』を取りあげ、それらの作品に登場する登場人物とネーミングの２つの型との関わりについて考察した。
2.風習喜劇のゆくえ――オスカー・ワイルド『まじめが肝心』を読む	単	2019年07月27日	武庫川学院創立80周年記念シンポジウム「魅力ある英語英米文学――その可能性を探して」（武庫川女子大学大学院英語英米文学専攻を母体とする院生会の主催による）。	シンポジウムの司会と講師。 玉井暲は、講師として迎えた、米本弘一（神戸大学名誉教授）、岩本朱未（武庫川女子大学大学院英語英米文学専攻博士後期課程3年生）の両名とともに、本シンポジウムを行い、同テーマについて問題提起を行う。 風習喜劇の基本的特質について、まず、英文学世界における演劇史にそって検討し、その輪郭を明らかにしたうえで、次に、具体的に、ワイルドの『まじめが肝心』を読むことを通して、その特質のさらなる剔出を行い、風習喜劇のもつ今日的意味を考察した。
3.J・ヒリス・ミラーの『嵐が丘』論再考――エミリー・ブロンテの『嵐が丘』を読み直す	単	2018年10月13日	日本ブロンテ協会２０１８年大会（於、中京学院大学）	シンポジウム「エミリー・ブロンテの『嵐が丘』を読み直す」（３名で担当）。 『嵐が丘』は、リアリズム小説である根拠として、リアリスティックな細部描写の存在を指摘することができる（キャサリンやヒースクリフの名前の落書、大雪で道標の消えた田舎道、主人公たち３人の墓石の様子等）。ところが、このような描写は、その場面の表層のありのままの描写にとどまらず、それ以上意味があることを訴える特質をもっている。即ち、その外的描写は、emblematic、または、figurativeな意味を喚起する。ヒリス・ミラーが注目するのは、このような小説の言葉の質である。 　ヒリス・ミラーは、『小説と反復』（１９８２）所収の『嵐が丘』論において、意味を喚起しつつ、その意味を特定するのが難しい、このような質をもった小説の言葉について考察した。その論考を改めて読解することにより、小説『嵐が丘』が孕んでいる魅了的な謎を考えてみた。
4.Comedy of Manners の系譜――王政復古期からWildeまで	単	2017年05月20日	日本英文学会第８９回全国大会	シンポジウム(４名で担当）。 まず、本シンポジウム全体の方針において、Comedy of Manners(風習喜劇） の基本的性格として、①マナーズと欲望の葛藤・対立の設定、②欲望の充足を図る展開という、二つの特質を指摘し、この特質が王政復古期劇、およびそれ以降のComedy (Novel) of Manners において、如何に表現され、また継承され変容されたかを探った。 Comedy of Manners における「欲望」は、①物質的欲望と②性的欲望の二つからなる。取り上げた主要な作品は、ウィッチャリー『田舎女房』、シェリダン『悪口学校』、オースティン『高慢と偏

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				見』、ワイルド『まじめが肝心』である。 玉井は、「『まじめが肝心』におけるマナーズと欲望との妥協／共犯」と題して、この風習喜劇テクストの固有の特質とこのジャンル一般の特質の考察を行った。
5.ウォルター・ペイターにおけるリアリズムと印象主義――『ルネサンス』再読	単	2016年12月17日	日本英文学会関西支部第１１回大会	ウォルター・ペイターの印象主義は、印象に基づいた内的ヴィジョンの構築をめざす詩学であるにしても、その批評的言説のありようは、内面の感情に耽溺することはなく、むしろ印象を冷静に物理的・生理的に分析するスタイルが少なからず見られる。この再検討すべき特質を、ジョン・ラスキンのpure fact を追及するリアリズム的姿勢と比較・対照することにより、ペイターの印象主義の新しい可能性を探ってみた。レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画に描かれる風景に対するペイターの批評言説のありようを考察してみると、ペイターの眼差しは、印象主義的リアリズム、内面的リアリズムとも称することができることを主張した。
6.世紀末文学における「黄金の書」のトポス――Walter Pater, *Marius the Epicurean* を中心にして	単	2014年05月	日本英文学会第８６回全国大会	ペイター『享楽主義者マリウス』において、主人公が友人から紹介されるアプレイウス『変身物語』のなかの一篇「キューピッドとサイキの物語」は、自らの文学観や主体形成に大きな影響を与える「黄金の書」となる。この「黄金の書」のモチーフは、ペイターだけでなく、世紀末の多くの作家にとっても共通にみられるモチーフとなっている。特に重要なのは、オスカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』においてドリアンに致命的な影響を与える「黄色の本」の存在である。ワイルドの小説では、この本は「毒を孕んだ書」と表現されているが、これは、黄金の書のもつ大きな影響力を逆説的に表現したものであろう。世紀末文学における「黄金の書」は、この生産的な「正」の影響と「負」の影響を及ぼす「毒を孕んだ書」との多義的な意味をもったエンブレムとして表象される。このありようを検証することにより、世紀末文学の詩学の一面を明らかにした。
7.ワイルドの批評再考――絵画論を中心に	単	2013年11月	日本ワイルド協会第３８回大会	オスカー・ワイルドが装飾芸術に強い関心を示している芸術的傾向の意味について、ウォルター・ペイターとジェイムズ・M・ホイッスラーの絵画論との相互関係を明らかにすることにより考察し、芸術ないしは文学テクストにおける「意味の不確定性」をポジティヴに評価するというワイルドの文学観の特質を明らかにした。
8.『ドリアン・グレイの肖像』を再読する	単	2009年12月	日本ワイルド協会第３４回大会	シンポジウムにおける司会と講師。 ４人の講師が、オスカー・ワイルドの唯一の長編小説をめぐって、今日どのような新しい読みができるのか、主体の揺らぎ、モダニズム文学との関わり、クイア批評、肖像・鏡のモチーフ等の観点から検討し、読みの可能性を探った。 講師の１人として、本人は、主人公が祖先の肖像画に異様な関心を示す叙述（１１章）をとりあげ、ワイルドにおける主体の揺らぎの問題について考察した。
9.批評理論と英文学教育――英語を教えること、英文学を教えること	単	2008年05月	日本英文学会第８０回大会	シンポジウムにおける講師。 講師の１人として、批評理論を教室で教える場合の幾つかの問題点、たとえばさまざまな理論の紹介と選択、教員と学生の側における特定の批評へのコミットメントをめぐる問題点などを指摘するとともに、その一方で、批評理論教育が学生のみずからの文学研究方法論を模索していく過程において有益となる可能性があることを主張した。
10.ワイルドのジャーナリズムに対するアンビヴァレンス――ワイルドとジャーナリズム	単	2007年12月	日本ワイルド協会第３２回大会	シンポジウムにおける司会と講師。 ワイルドとジャーナリズムの関係について、４人の講師が、アンビヴァレントな姿勢、雑誌『女の世界』、唯美主義、ゲイ批評の観点から考察を加えて検討した。本人は、ワイルドのジャーナリズムに対するアンビヴァレントな姿勢のなかに、２０世紀になって顕在化する「大衆」のもつ権力と趣味の問題へのワイルドの鋭いまなざしを窺うことができることを示唆した。
11.ペイター文学の原風景	単	2007年10月	日本ペイター協会第４６回大会	シンポジウムにおける司会と講師。 唯美主義の批評家が追い求めねばならないオリジナル・ファクトとは何か、という問題意識をもってペイター文学について考えたとき、そこに浮かび上がる風景こそペイターの原風景であると思われ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				る。４人の講師が、自ら考えるペイターの原風景を提示し、検討しあった。
12.英文学の楽しみ方――英米文学研究の展望	単	2005年12月	日本英文学会関西支部設立準備大会	シンポジウムの司会。 表記のテーマをめぐって、４人の講師がおのおのの英米文学の専門領域にもとづいてレポートしてもらい、多面的に検討を行った。
13.ハーディの詩と小説の関連性――詩のなかの物語性	単	2005年11月	日本ハーディ協会第４８回大会	シンポジウムにおける講師。 講師の１人として、表記のテーマをめぐって、ハーディの代表的な詩を数篇とりあげ、物語を構築する場合の基本的条件となると考えられる――特にリアリズムの場合――５Ｗ１Ｈの観点からそれらの詩の分析を行い、この条件を満たしていないにもかかわらず、物語世界が成立していることを明らかにし、その理由について考察を行った。
14.ワイルド文学と身体――批評の修辞的身体	単	2004年12月	日本ワイルド協会第２９回大会	シンポジウムにおける講師。 講師の１人として「逆説」に注目した。ワイルドが逆説的な批評言語を駆使したのは、「世界を所有するための言語を所有し、みずからに同化し尽くすことができないという逆説的な事態」（松浦寿輝）を鋭く意識したといえる。この言語動物にとっての不可避の逆説的状況をテクスト化するものこそ、ワイルドにおける批評の修辞的身体であったと考えられる。
15.ペイターのロマンティック・コネクション	単	2003年10月	日本ペイター協会第４２回大会	シンポジウムにおける司会と講師。 ペイター文学とロマン主義との関係を探る、講師４名によるシンポジウムである。本人は、ペイターの「鑑賞集:跋文」、コールジッリ論、ワーズワス論を取り上げて、後期ロマンス主義者としてのペイター像を描き出した。
16.２１世紀のワイルド――ワイルド文学の可能性を探る	単	2002年12月	日本ワイルド協会第２７回大会	シンポジウムにおける司会と講師。 表題をめぐって、４名の講師が、ワイルド研究の現在、セクシュアリティ、アイリッシュネス、１９世紀英国思想史の各観点から、検討を行った。 本人は、現在のワイルド研究に、歴史・政治とジェンダー・セクシュアリティの関心にもとづいた２つの大きな傾向がみられることを指摘したうえで、こうしたコンテクスト重視の研究が陥りやすい陥穽として、文学テクストからの遊離についてあえて注意を喚起しておいた。
17.＜英文科＞に何を期待するか	単	2002年11月	阪大英文学会第３５回大会（大阪大学文学部）	シンポジウムにおけ司会と講師。 「英文科」の存在とその役割が厳しく問われる状況が生まれている現在、いま、「英文科」はどのようなニーズに応えていかねばならないのか。４名の講師からおのおの問題提起をしてもらって、議論を行った。
18.イギリス文学と空間表象	単	2002年10月	日本英文学会九州支部第５５回大会	シンポジウムにおける司会と講師。 ４人の講師から、おのおの自分の専門分野（空間表象論概論、ルネサンス、ロマン主義、トマス・ハーディ）において「空間表象」というテーマがどのように展開できるか、報告をしてもらい、それらの見解をめぐって議論を行った。 本人は、空間表象についての基本的な考え方とその流れを整理し、本シンポジウムにおいて検討すべきいくつかの問題点を提起した。
19.大学における”English”の現在と未来	単	2000年11月	阪大英文学会第３３回大会	シンポジウムにおける司会。 大学における英語教育のゆくえ、あるいは英文科のゆくえについて、現況の分析を踏まえて、専門分野が異なり、また教員経験の異なる５名の講師から未来へのヴィジョンを提示してもらい、それに基づいて議論を行った。
20.『アグネス・グレイ』を読む	単	2000年10月	日本ブロンテ協会２０００年度大会	シンポジウムにおける司会と講師。 ブロンテ姉妹の末妹アンの『アグネス・グレイ』をめぐって、講師３人がそれぞれ、どのような新しい読みができるのかを提示し、それらをもとにしてこの小説の可能性について議論を行った。本人は、「女性における職業」が取り上げられた小説として注目し、この観点からの評価を行った。
21.ハーディ・アラカルト――トマス・ハー	単	2000年10月	日本ハーディ協会第４３回大会	シンポジウムにおける講師。 ハーディを現代批評理論に代表される新しい読みの観点から読み直

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
ディを読むＪ．ヒリス・ミラー				せば、どのような面が発見できるか、探るシンポジウム。本人は、Ｊ．ヒリス・ミラーがハーディの言語の「不透明性」に注目している面を紹介した。
22.世紀末とヴィクトリアニズム	単	2000年05月	日本英文学会第７２回全国大会	シンポジウムにおける司会と講師。 ジョン・ラスキンからウィリアム・モリス、ウォルター・ペイターを経て、オスカー・ワイルドに至るイギリス文学を Aestheticism の文学の展開と見て、Aestheticism は、Victorianism という途方もなく巨大な「制度」といかなる関係にあったのか。反発し続けたのか、あるいは共同歩調をとったのか。 Aestheticism 自体の孕む多面性を考慮にいれつつ、大きなコンテクストのなかでAestheticism の読み直しを図った。イギリス史研究者の草光俊雄の協力を得て、富士川義之、河内恵子を含む講師４人によるシンポジウム。 本人は、ラスキンのpathetic fallacy 論からペイター、ワイルドの批評エッセイを取り上げ、言語意識の差異、詩学としての唯美主義、生の哲学としての唯美主義等を検討し、世紀末の文学者に窺われる共通の発想と差異面の両面から、ラスキンからワイルドに至る文学が抱えている問題性を考察した。
23.『オスカー・ワイルド事典』をめぐって	単	1997年11月	日本ワイルド協会第２２回大会	日本ワイルド協会の編集・協力により完成した『ワイルド事典』（北星堂）について、編集者の多数が集合し、その編集方針から刊行の意味の確認に至るまで、本書に関する諸問題についての総括を行った。
24.ハーディ文学におけるパストラル	単	1997年10月	日本ハーディ協会第４０回大会	シンポジウムにおける司会と講師。 ハーディ文学がもっているパストラルの今日的意味について、講師４名によって多方面から検討を行った。
25.W. Pater 研究再考――ペイター文学と現代批評	単	1996年10月	日本英文学会中部支部第４８回大会	シンポジウムの講師。 講師の１人として、ペイター文学は現代批評理論の一つ、Ｊ．ヒリス・ミラーやハロルド・ブルームに代表される脱構築批評から見直されている状況について解説を加え、ペイター文学再評価への視角を示唆した。
26.ワイルドの喜劇――『真面目が肝心』を中心に	単	1995年11月	日本ワイルド協会第２０回大会	『真面目が肝心』を中心にして、ワイルドの喜劇の特に言語面において持っている今日的意味について考察した。
27.*The Mayor of Casterbridge* を読む	単	1994年10月	日本ハーディ協会第３７回大会	シンポジウムにおける司会と講師。 ハーディの小説『カースタブリッジの町長』のもつ意味を、４人の講師がおのおの提示し、あらたな読み直しの視角を探った。
28.ハーディと世紀末	単	1992年05月	日本英文学会第６４回全国大会	シンポジウムにおける講師。 トマス・ハーディ文学をイギリス世紀末の文学や文化現象の観点から考察すればどのような新鮮な風景が見えてくるのか。４人の講師によるシンポジウムである。本人は『日蔭者ジュード』を中心にして考察した。
29.『サロメ』復活	単	1990年10月	日本ワイルド協会第１２回夏季セミナー	シンポジウムにおける講師。 講師の１人として、『サロメ』におけるセクシュアリティにもとづく欲望と法の言葉に代表される制度とが葛藤する点に、この作品の劇的なるものを指摘した。
30.ホイッスラーと世紀末芸術	単	1990年10月	日本ワイルド協会関西支部第４回世紀末セミナー	イギリス世紀末の絵画界を代表するＪ．Ｍ．ホイッスラーの絵画作品と芸術観が、物語性や意味を喚起しない装飾的空間という点において、いかに世紀末芸術の特徴を形成しているかを論じた。
31.ワイルドの Creative Criticism 再考	単	1990年04月	名古屋大学英文学会１９９０年度大会	シンポジウムにおける講師。 講師の１人として、ワイルドの「創造的批評」のもつ意味について、現代のポスト構造主義の批評理論の発想に類似している面を指摘し、その観点からの評価を行った。
32.*The Well-Beloved* の美学	単	1989年10月	日本ハーディ協会第３２回大会	シンポジウムにおける講師。 講師の１人として、『恋の霊』における物語空間が芸術創造衝動と市民的生活衝動との葛藤の上に成立してしていることを指摘し、ハーディの小説家としての一つの究極的なヴィジョンを提示したものとして読めることを示唆した。
33.＜世紀末＞の思想と文学――イギリスの	単	1989年06月	第８１回大学共同セミナー（関西地	シンポジウムにおける講師。 世紀末の思想と文学の特徴を、イギリス・ドイツ・フランスの領域

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
世紀末文学：ペイター、ワイルド、ビアズリー			区大学セミナーハウス）	から分析・考察することによって明らかにすることをめざしたシンポジウム。本人は、イギリス世紀末文学・芸術における「ピグマリオンのモチーフ」の存在を指摘し、その意味を考察した。
34.ワイルドと美術	単	1988年07月	日本ワイルド協会第１０回夏期セミナー	シンポジウムにおける講師。 講師の１人として、ワイルド文学とＪ．Ｍ．ホイッスラーの芸術観との相互関係について論じた。
35.ワイルドをめぐる人々――その美意識の系譜：ラスキン、ペイターからワイルドへ	単	1987年07月	日本ワイルド協会第９回夏期セミナー	シンポジウムにおける講師。 講師の１人として、ラスキン、ペイター、ワイルドにおける唯美主義批評の展開の軌跡をたどった。
36.ダンディの劇的機能	単	1981年12月	日本ワイルド協会第７回大会	ワイルドの劇空間におけるダンディの表象について、言葉のレベルにおけるappearance とrealityの乖離を意識的に行う行為がとられることを指摘し、こうした意識のかたちや言語使用はダンディとは異なるタイプの登場人物には見られないことを明らかにした。ここにワイルドのダンディが物事を複眼的、多面的に見る視角を提供する機能を果たしているものとして注目した。
37.*The Importance of Being Earnest* における構成	単	1979年05月	日本英文学会第５３回全国大会	『真面目が肝心』のナンセンスでファース風の構成面に指摘できるのは、言葉と行動の２つの次元で相反するダンディ像を提示する構成になっていること。もう一つは力学関係を基盤にしてペアをなす人間関係の組が多数見られるることである。こうした２つの特質について、そのそれぞれにおける人間存在のありようにあっては、安定した関係性の世界をつくりあげることがなく、転覆の可能性を秘めた相対的な関係に基づいて自己を形づくっている。しかもこの不安定な関係こそ、自己を成り立たせ保証してくれるものでもある。このような絶対性に揺らぎが生じている世界こそ、ワイルドのダンディたちが獲得した世界であると考えられる。
38.シモンズの象徴主義	単	1975年10月	日本英文学会中国四国支部第２８回大会	シモンズの象徴主義における言語意識がもっている意味を、世紀末の他の詩人・批評家たちの詩学と比較対照することにより考察した。
39.世紀末文学における’moment’について	単	1973年11月	阪大英文学会第７回大会	ペイター、ワイルド、シモンズらの世紀末の文学者が「瞬間」にこめる意味について考察した。ここにT. S. エリオットの詩的世界との継続性を示唆した。
40.Arthur Symons と Decadence	単	1972年10月	日本英文学会中国四国支部第２５回大会	シモンズの「デカダンス」観を検証することにより、イギリスの世紀末文学におけるデカダンス文学に対するイメージを確認し、やがて象徴主義に転じていくシモンズの内面を探った。
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.『シャーリー』の”randomness”の魅力	単	2024年4月1日	日本ブロンテ協会、”Bronte Newsletter of Japan,”第１０８号、1ページ。	エッセィ シャーロット・ブロンテの小説『シャーリー』は多面的な読み方のできる小説である。統一性(unity) に欠けていて、まとまりのなさ(randomness)がその特質と指摘され、これが本小説の欠点として評価されるきらいがある。 しかし、この小説の中でゴシック小説（ラドクリフ『イタリア人』）への言及に注目すると、女性の自立を求める側面が、ブロンテの先の小説『ジェイン・エア』に結びつくことが分かる。ゴシック小説への関心が、先輩作家のジェイン・オースティンとは異なる意味をもっていることが見て取ることができるのだ。このような、小説の詩学を意識している面が窺われるのが、この小説のrandomnessのもつ隠れた魅力であろう。
2.『ジェイン・エア』と漱石	単	2024年1月	日本ブロンテ協会関西支部『ニューズレター』、第２３号、.p. 1.	エッセィ 夏目漱石の『文学論』(1907) は、漱石の文学観を知るには不可欠の文献である。この中で、漱石はシャーロット・ブロンテの小説『ジェイン・エア』の特質を考察する論述において、自らの文学観を表明している。漱石が、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』をリアリズム小説の典型であるとすれば、『ジェイン・エア』

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
				はロマン主義文学の典型的な小説だと見なしている根拠を明らかにした。
3.石田久先生を偲んで――良識の英文学者――	単	2022年12月	日本ブロンテ協会『ブロンテ・スタディーズ』第７巻、第２号、pp. 3-4.	エッセィ ２０２２年４月に逝去された英文学者・石田久先生（元日本ブロンテ協会会長、大阪大学名誉教授）を追悼する文章。
4.記憶のなかのオックスフォード	単	2022年10月1日	日本ペイター協会『日本ペイター協会会報』第４３号. pp. 12-15.	エッセィ。 オックスフォード大学にて留学生活を送った経験（1985-86）について、コレッジ・ライフ、アカデミック・ライフ、オックスフォードの学位論文と研究のスタイル、老いの夢、等の観点から、回想的につづった文章。
5.深澤俊先生を偲んで――ジェントルマンの英文学――	単	2022年9月15日	日本ハーディ協会『ハーディ研究』（日本ハーディ協会会報）、No. 48. pp. 11-14.	エッセィ。 ２０２２年２月に逝去された英文学者・深澤俊先生（元日本ハーディ協会会長）を追悼する文章。
6.レトリックを再考する契機を示唆してくれる豊かさを感得させる書	単	2022年2月26日	『図書新聞』、第３５３２号、p. 4.	書評。 イギリスの文学批評家、I.A. リチャーズ（Ivor・Armstrong・Richards）の名著『レトリックの哲学』（*The Philosophy of Rhetoric* , 1936）の翻訳書（村山淳彦訳、未来社）を書評したエッセイ。 I・A・リチャーズが隠喩（メタファー）を「主意」と「媒体」の二元的観点から考察する論には再評価すべき価値のあることを指摘し、本訳書の今日的意味を強調した。
7.シーモア・チャットマン『ストーリーとディスコース――小説と映画における物語構造――』	単	2022年1月	水声社	翻訳。 単独訳。 アメリカの現代における物語論の代表的な研究者シーモア・チャットマンの古典的名著を全訳したもの。チャットマンは、英米の伝統的な物語理論家であるウェイン・ブース、ノースロップ・フライや、小説家ヘンリー・ジェイムズ、Ｅ・Ｍ・フォースターの物語論を踏まえ、さらにロシア・フォルマリストのプロップ、フランス構造主義文学理論家のロラン・バルトやジュネットらの物語論を取り入れて、独自の構造主義的物語理論を構築した。その物語論は、小説だけでなく、映画の分析にも適用されるものである。本書は、英米系の物語論の紹介が手薄な日本において、小説と映画における「物語」の研究をする上で重要な、必須の研究文献である。４００ページ。 原著は、Seymour Chatman, *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film* (Cornell UP, 1978). 277 pp.
8.「粗雑な模様（a coarse pattern)をめぐって――『テス』とJ・ヒリス・ミラーと私――	単	2021年9月1日	日本ハーディ協会「日本ハーディ協会ニュース」、第９０号、pp. 1-3.	エッセイ・研究ノート。 トマス・ハーディの小説『テス」のなかで、最も興味深い場面で、かつ問題を孕んだ描写が展開されると考えられるテスのrape/seduction の叙述をとりあげ、その意味を考察するには、本年逝去されたアメリカの現代批評家ヒリス・ミラーが著わした『小説と反復』（1982年、日本語翻訳版1991年）に収録されている論文が極めて刺激的であることを主張した。
9.トマス・ハーディ『ラッパ隊長』	共	2020年12月	大阪教育図書株式会社	翻訳。 共訳者：玉井暲、渡千鶴子、伊藤佳子。 イギリスの後期ヴィクトリアから２０世紀初頭にかけて活躍した小説家・詩人トマス・ハーディの小説『ラッパ隊長』（*The Trumpet-Major*、１８８０）を翻訳・出版したもの。ナポレオン戦争を取り上げた歴史小説である。ナポレオン侵攻の恐怖に怯えながらも、したたかに日常生活を送るイギリス南西部の海岸の村に住む人びとの群像が描かれている。愛と戦争の感動的な小説の新訳である。
10.イギリス文学に描かれる世相――物語の中の現実――	単	2020年10月9日(2020年10月から)	「宮水学園」（西宮市生涯学習事業課主催）による連	講演。 イギリスの主に１８～１９世紀における小説と詩をもとにして、その文学作品の中に描かれた英国の当時の文化や社会状況を検証し、

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
			続講演（計１０回）	英国的特質（イングリッシュネス）を解き明かした。講演の内容は以下のとおり： １）「四季をめぐってーーイギリス文学の世界への誘い」（２０２０年１０月９日） ２）「海外冒険小説の中のイギリス人ーーダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』とジョナサン・スウィフト『ガリヴァー旅行記』」（２０２０年１０月１６日） ３）「ロマン派の詩とイギリスの田園風景――ウィリアム・ワーズワス『叙情歌謡集』」（２０２０年１１月６日） ４）「女性における結婚相手の条件とはーージェイン・オースティン『高慢と偏見』」（２０２０年１１月２０日） ５）「女性の職業と自立ーーシャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』」（２０２０年１２月４日） ６）「ジェントルマンとしての自立ーーチャールズ・ディケンズ『デイヴィッド・コパーフィールド』」（２０２０年１２月１８日） ７）「ローマへのハネムーンの喜びと悲惨――ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』」（２０２１年1月１５日） ８）「旧家の没落と新生ーートマス・ハーディ『ダーバヴィル家のテス』」（２０２１年1月２２日） ９）「大人の童話ーーオスカー・ワイルド『幸福の王子』」（２０２１年2月１２日） １０）「日本文化の再発見ーーラフカディオ・ハーン『知られぬ日本の面影』」（２０２１年2月２６日）
11.ロバート・アッカーマン『評伝J・G・フレイザー　ーーその生涯と業績』	共	2020年07月	法蔵館	翻訳。 玉井暲監訳：小松和彦監修、共訳者として、玉井暲、山田雄三、鴨川啓信、平井智子、中村仁紀、金崎八重。 すでに刊行していた訳書（２００９年刊）を、索引を追加するなど、一部再編集を行い、法蔵館文庫版として再版したもの。上（414 pp）と下（484 pp）の２巻からなる。 イギリスの１９世紀末から２０世紀前半にかけて活躍し、専門の人類学の世界のみならず、文学や思想の世界に対しても大きな影響を及ぼしたた人類学者ジェイムズ・ジョージ・フレイザーの生涯についての伝記。アメリカの人類学者ロバート・アッカーマンが著した評伝を全訳したもの。 原著は、Robert Ackerman, *J.G. Frazer : His Life and Work* (Cambridge: Cambridge UP, 1987).
12.エイザ・ブリッグズ『ヴィクトリア朝のもの』	共	2020年04月	国文社	翻訳。 玉井暲監訳：米本弘一共監訳、共訳者として、玉井暲、米本弘一、新野緑、正木みき、服部慶子、西村美保、鴨川啓信、伊勢芳夫。 イギリスの現代の歴史学者であるエイザ・ブリッグの著した研究書、ヴィクトリア朝三部作のうちの一冊を翻訳したもの。ヴィクトリア朝時代に発明されたさまざまな「もの」について、文化史の観点から考察したもの。518 pp. 原著は、Asa Briggs, *Victorian Things* (London: B.T. Batsford Ltd., 1988).
13.作家におけるペンネームの表と裏――女性作家の場合ーー	単	2019年3月22日	『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第２９号（武庫川女子大学言語	研究発表収録。 作家が作品を発表する場合、近代社会にあっては、本名、ペンネーム、無記名という３つの発表形式のうち、そのいずれかの形がとられるのが一般的である。英文学においては、特に女性作家の場合、

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
			文化研究所）,115-19.	どの形で作品を発表したのか、そこには女性に関わる地位や差別的慣習等の問題が関わっていたのではあるまいか。ジェイン・オースティン、ブロンテ姉妹、ジョージ・エリオットらにおけるペンネームに関する事情を考察し、女性作家と発表氏名との間に横たわる諸問題を考察した。
14.ノーベル文学賞受賞者における作品タイトルの翻訳について――ネーミングのコトバ学	単	2018年3月31日	『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第２８号、pp. 81-87.	研究発表収録。 言語文化研究所シンポジウム「ネーミングのコトバ学」（II)の発表報告。 文学作品におけるネーミングの問題の中心の一つは作品タイトルの翻訳に現れると考え、３人のノーベル賞受賞者の作品の原題とその翻訳タイトルを比較検討した。カズオ・イシグロ（イギリス文学）、アーネスト・ヘミングウエイ（アメリカ文学）、川端康成（日本文学）の作品について検討し、タイトルの言葉がもっている文化的意味を前提にすると、１）直訳か意訳か、２）文語訳か口語訳か（現代化日本語訳・現代英語訳）の点に集約できることを明らかにした。イシグロの場合、日本人が登場する小説で、登場人物にどんな漢字を当てて翻訳すべきかが大きな問題となることも指摘した。このような性格をもつ翻訳の問題は、国際化の進んだ世界を描く場合、名前や地名をカタカナ/漢字/その他の言語のどの表記を選ぶべきかという新しくて普遍的な課題となることも示唆した。
15.Comedy of Manners の系譜――王政復古期からWilde まで	単	2017年9月15日	『日本英文学会第８９回全国大会Proceedings』、pp. 75-76.	研究発表収録。 シンポジウム「Comedy of Manners の系譜――王政復復古期から Wilde まで」（４名で担当）。 まず、本シンポジウム全体の方針において、風習喜劇の基本的性格として、①マナーズと欲望の葛藤・対立の設定、②欲望の充足を図る展開という、二つの特質を指摘し、この特質が王政復古期劇、およびそれ以降のComedy（Novel）of Manners において、如何に表現され、また継承され変容されたかを探った。Comedy of Manners における「欲望」は、①物質的欲望と②性的欲望の二つからなる。取り上げた主要な作品は、ウィッチャリー『田舎女房』、シェリダン『悪口学校』、オースティン『高慢と偏見』、ワイルド『まじめが肝心』である。 玉井は、「『まじめが肝心』におけるマナーズと欲望との妥協／共犯」と題して、オスカー・ワイルドのこの風習喜劇テクスト固有の特質を考察し、さらに風習喜劇というこのジャンル一般の特質についての輪郭を描出した。
16.ウォルター・ペイターにおけるリアリズムと印象主義――『ルネサンス』再読	単	2017年9月15日	『日本英文学会第89回大会Proceedings――2016年度 関西支部第11回大会Proceedings』, pp. 264-65.	研究発表収録。 ウォルター・ペイターの印象主義は、印象に基づいた内的ヴィジョンの構築をめざす詩学であるにしても、その批評的言説のありようは、内面の感情に耽溺することはなく、むしろ印象を冷静に物理的・生理的に分析するスタイルが少なからず見られる。この再検討すべき特質を、ジョン・ラスキンのpure fact を追及するリアリズム的姿勢と比較・対照することにより、ペイターの印象主義の新しい可能性を探ってみた。レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画に描かれる風景に対するペイターの批評言説のありようを考察してみると、ペイターの眼差しは、印象主義的リアリズム、内面的リアリズムとも称することができることを主張した。
17.海老根宏著「ジョージ・エリオットにおける現実と非現実――『これは一つの比喩である』」をめぐって	単	2016年11月09日	日本ジョージ・エリオット協会編『ジョージ・エリオット研究』、第１８号：87-96.	書評。 海老根宏・高橋和久共編著『一九世紀「英国」小説の展開』（松柏社）所収の海老根宏氏の論文について書評したエッセイ。海老根氏は、G.エリオットのリアリズム小説においては、現実のあるがままの描写を求める伝統的なリアリズムが厳然として存在する一方で、非現実の世界に関心を向けたいわばもう一つのリアリズムが出現していることを指摘する。さらに、この非現実への着眼は、エリオットの後期小説において大きな発展を見せ、この新しい局面への取り組みと伝統的リアリズムとの接合を実現させたことが、エリオットにおける小説家としての成長であったと結論づけている。この指摘・主張は優れた慧眼として高く評価できるものと判断する。さらに、この見方は、エリオット１人に適用できるだけでなく、ヴィク

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
				トリア朝リアリズム小説全体の展開をみる時の大きなパースペクティヴにもなり得るものとして判断でき、本論文の意義を高く評価した。
18.イギリス世紀末文学とリアリズム	単	2016年9月16日	『日本英文学会第８８回大会Proceedings――２０１５年度日本英文学会北海道支部第６０回大会Proceedings』、pp. 147-48.	研究発表収録。 イギリス世紀末文学は、ヴィクトリア朝リアリズムの伝統をどのように継承し、どのようにリアリズムに反発して、その問題性を克服したのか。ファンタジー、フェアリー・テイル、心理的ロマンス、冒険小説、探偵小説などのサブ・ジャンルに属する文学作品が出現した状況のなかで、この文学現象とリアリズム小説との相互関係を考察した。このコンテキストを踏まえて、オスカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』を読み直してみると、フェアリー・テイルのパロディと読解できる側面が浮上し、ここにリアリズムからの脱皮を志向しようとする可能性が見て取れることを指摘した。
19.批評の固有性――J. Hillis Miller, *Fiction and Repetition: Seven English Novels* (1982)	単	2015年01月	日本英文学会『英文学研究・支部統合号』、第７巻、pp. 201-05.	書評エッセイ 日本英文学会関西支部の機関誌『関西英文学研究』には、編集企画のひとつとして、何人かの研究者にその人の研究生活のなかで忘れがたい本を一冊取り上げてもらって、その本との関わりをエッセイ風に書評してもらうコーナーがある。本稿は、このコーナーに寄稿した書評エッセイ。J.ヒリス・ミラーの『小説と反復：七つのイギリス小説』について、その翻訳経験（１９９１年、英宝社刊）をも振り返りつつ、本書のもっている今日的な意味を検証し、著者ヒリス・ミラーの本書刊行後の旺盛な批評活動を視野にいれて、この英文学研究者の営む批評の原質ともいえる、文学言語の異種混交性を追い求める姿勢を明らかにしようとしたエッセイ。
20.世紀末文学における「黄金の書」のトポス――Walter Pater, *Marius the Epicurean* を中心にして	単	2014年09月	日本英文学会『日本英文学会第８６回大会Proceedings』、pp. 41-42.	研究発表収録 イギリス世紀末文学において「黄金の書」というモチーフがその文学空間に広範に窺えることを、ペイター『享楽主義者マリウス』を典型的な原型として考察することを通して明らかにした。また、このモチーフが「負」の意味作用を帯びると「毒を孕んだ書」と変容する面があることを、ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』の考察により明らかにし、世紀末の言語空間にあっては、このモチーフが「正」と「負」の両面を帯びるダイナミズムを検証した。
21.ジョージ・エリオット『スペインのジプシー』解説	単	2014年06月	ジョージ・エリオット全集第９巻『スペインのジプシー、他二編（とばりの彼方、ジェイコブ兄貴）』（彩流社）、pp. 249-59.	作品解説。 ジョージ・エリオットの長編物語詩『スペインのジプシー』（１８６８）について、作品誕生の背景、描かれたテーマ、物語の結末、モダニティの中のエリオットの観点から、この詩のもっている今日的意味を説き明かした。
22.『ジュード』のなかのモダニズム / ゴシック	単	2013年09月	日本ハーディ協会編『日本ハーディ協会ニュース』、第７４号：１－３.	エッセイ・研究ノート。 『ジュード』のなかのもっとも衝撃的な出来事と考えられる、リトル・ファーザー・タイムによる弟妹殺害・自殺事件を取り上げ、小説作品におけるこの事件のもつ意味を、モダニズム的文脈とゴシック・コネクションとの両面から考察し、新しい解釈の可能性を探った。
23.ジョージ・エリオットとジョン・ラスキン	単	2013年06月	日本ジョージ・エリオット協会編 *George Eliot Newsletter of Japan*, 第１７号：１－２.	エッセイ・研究ノート。 ジョージ・エリオットがみずからのリアリズム観を確立するに当って、ジョン・ラスキンの存在が大きかった事実が知られているが、この面を検証するために、ラスキンの『近代画家論』第３巻についてのエリオットの書評を取り上げ、２人の文学者に窺うことのできる「個別性（particularity)」を志向する眼差しについて考察した。
24.廣野由美子著『一人称小説とは何か』	単	2012年12月	日本ブロンテ協会編『ブロンテ・スタディーズ』、第５巻第４号：123-30.	書評。 廣野由美子著『一人称小説とは何か――異界の「私」の物語』（ミネルヴァ書房）の書評。小説においては迫真性（verisimilitude）はもっとも重要な要素の一つである。著者は、特に一人称小説においては、この特質の創出に深く関わっている要素として語り手の果たす異化作用の機能を重視し、その機能のありようを具体的なテク

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
				ストに即して詳述している。本書におけるこうした物語論の趣旨と展開に注目し、本書の意義を高く評価した。
25.パトリシャ・インガム著『トマス・ハーディ』	単	2012年10月	『週刊読書人』、第２９６０号：５．	書評。 パトリシャ・インガム著『トマス・ハーディ――時代のなかの作家たち３』（鮎澤乗光訳、彩流社）の書評。ハーディ文学の全貌の新たな描出に成功し、ハーディ文学の新しい意味を掘り起こした研究書として評価した。
26.パトリシャ・インガム著『ブロンテ姉妹』	単	2011年01月	『週刊読書人』、第２８７１号：３．	書評。 パトリシャ・インガム著『ブロンテ姉妹――時代のなかの作家たち１』（白井義昭訳、彩流社）の書評。ブロンテ文学の可能性を掘り起こすことに成功した研究書として評価した。
27.世紀末文学のなかのスウィンバーン	単	2010年10月	日本ペイター協会編『日本ペイター協会会報』、第３１号：１４－１５．	書評。 上村盛人著『スウィンバーン研究』（淡水社、平成２２年）の書評。長年にわたるスウィンバーン研究を集大成したもので、堅実な研究に基づいた、現在の日本における本格的なスウィンバーン論として高く評価した。
28.ウォルター・ペイター著『ガストン・ド・ラトゥール』	単	2010年04月	『週刊読書人』、第２８３６号：５．	書評。 ウォルター・ペイター著『ガストン・ド・ラトゥール』（小田原克行訳、松柏社）の書評。ペイター文学の重要なテーマを孕んだ難解な小説が日本語で読めるようになったことを慶賀し、翻訳の労を評価した。
29.山川鴻三先生の思い出：追悼	単	2009年10月	日本ペイター協会編『日本ペイター協会会報』、第３０号：１２－１４．	エッセイ。 大阪大学文学研究科英文学専攻の主任教授であった故山川鴻三教授について、生涯にわたるウォルター・ペイター研究の軌跡とその特徴を簡潔に紹介したもの。
30.『シャーリー』の中のゴシック小説	単	2009年02月	日本ブロンテ協会関西支部編 *Purple Heather: The Bronte Newsletter Kansai*、第８号：１．	エッセイ・研究ノート。 シャーロット・ブロンテの『シャーリー』の女性主人公の一人キャロラインにおいては、女性の自立・外の世界への憧れの対象がラドクリフ夫人の『イタリア人』に代表されるゴシック小説となって表象されていることが興味深い。ブロンテ文学に潜むゴシック小説的世界への傾斜を分析するひとつの視角を提示した。
31.ロバート・アッカーマン 『評伝　Ｊ．Ｇ．フレイザー――その生涯と業績	共	2009年02月	法蔵館	翻訳。 玉井暲監訳、共訳者：玉井暲、山田雄三、鴨川啓信、平井智子、中村仁紀、金崎八重。 19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍したイギリスの人類学者、ジェイムズ・G・フレイザーについて、アメリカの人類学者ロバート・アッカーマンがその生涯と業績にわたって詳述した伝記を翻訳したもの。xiii＋631 pp. 原著は、Robert Ackerman, *J.G. Frazer: His Life and Work* (Cambridge: Cambridge UP, 1987).
32.横断する文学としての文学環境論――その可能性をめぐって	共	2008年12月	『待兼山論叢（文化動態論篇）』（大阪大学文学研究科編）、第４２号：７１－１１４．	座談会。 玉井暲、米井力也、平田由美、石割隆喜、三宅祥雄による、文学環境論の可能性をめぐっての座談会。
33.ラフカディオ・ハーンの見た大阪	単	2008年04月	『懐徳堂記念会だより』（大阪大学懐徳堂記念会編）、第８０号：６－７．	エッセイ。 ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が大阪見物をしたときの旅行印象記（１８９６年）を取り上げ、ハーンが、水の都（日本のベニス）としての都市、四天王寺に代表される市民の宗教観、商家の丁稚に窺える船場の文化等に興味を示している様子を簡潔に紹介した。
34.マイケル・ルーイス著『ゴシック・リバイバル』	単	2004年12月	『週刊読書人』、第２５６５号：５．	書評。 マイケル・ルーイス著『ゴシック・リバイバル』（粟野修司訳、英宝社、２００４）の書評。イギリス・ヴィクトリア朝においてゴシック的なるものを重視する傾向が生まれた理由とその文化現象を適格に説明し、そしてその具体的な例を適切に紹介した書として評

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
				価した。
35.竹友藻風と野鳥	単	2004年08月	『野鳥』（財団法人日本野鳥の会編）、第６７８号：２７．	エッセイ。 学匠詩人竹友藻風が日本野鳥の会の創設に参加した事実を踏まえ、野鳥をめぐるエッセイを多数執筆している状況に触れ、藻風の趣味の知られざる一面を紹介した。
36.丹治愛編『知の教科書　批評理論』	単	2004年02月	『英語青年』（研究社）、２００４年２月号：５２－５３．	書評。 丹治愛編『知の教科書　批評論』（講談社選書メチエ、２００３）の書評。現代批評理論の幾つかを選び、その具体的で適切な紹介をしている面を高く評価した。
37.『埋もれた風景たちの発見――ヴィクトリア朝の文芸と文化』	単	2003年11月	『ヴィクトリア朝文化研究』（日本ヴィクトリア朝文化研究学会編、２００２）、第１号：８０－８３．	書評。 『埋もれた風景たちの発見――ヴィクトリア朝の文芸と文化』（中央大学人文科学研究所編、２００２）の書評。ヴィクトリア朝の詩人・小説家についての優れた風景論が収められた興味深い書物として高く評価した。
38.山崎弘行編著『英文学の内なる外部――ポストコロニアルと文化の混交』	単	2003年07月	『週刊読書人』、第２４９４号：４．	書評。 山崎弘行編著『英文学の内なる外部――ポストコロニアルと文化の混交』（松柏社、２００３）の書評。新鮮な観点からの優れた論文を収録した書物として高く評価した。
39.言語テクストと映像テクスト	単	2003年04月	日本ブロンテ協会編　*Bronte Newsletter of Japan*、第５８号：１．	エッセイ・研究ノート。 シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』を仮に映画化するとすれば、主人公ルーシーが美術館を訪れてクレオパトラを描いた絵を見る場面が興味深い。ただし、この場面の叙述から得られるインパクトは、言語と映像のうち、どちらから得るもののほうが強烈になるのだろうか。デヴィッド・ロッジがこの場面に見て取った「異化作用」に言及して、問題提起をした。
40.ジョージ・ヒューズ　『ハーンの轍の中で――ラフカディオ・ハーン、外国人教師、英文学教育	共	2002年10月	研究社	翻訳。 玉井暲、平石貴樹　共訳。 日本の幾つかの有力大学で長く英文学を講義し、最後は東京大学招聘教授となって活躍した英文学者ジョージ・ヒューズ（George Hughes)博士が、外国人教師としての経験を踏まえて、日本における英文学教育とラフカディオ・ハーンについて論じた論文・エッセイを翻訳したもの。vi＋239 pp.
41.竹友文庫と藤井文庫	単	2002年03月	『大阪大学図書館報』、第３５巻第４号：４－６．	エッセイ。 大阪大学図書館に、故竹友藻風教授の旧蔵書とそのご子息の故藤井治彦教授の旧蔵書が寄贈され、それぞれ「竹友文庫」、「藤井文庫」として収められている。両文庫が、英文学研究にとって貴重な図書として活用されている様子について紹介した文章。
42.ウォルター・ペイター　『ウォルター・ペイター全集』、第1巻	共	2002年02月	筑摩書房	翻訳。 玉井暲、富士川義之（編集代表）、その他による共訳。 イギリス19世紀末文学を代表する作家ウォルター・ペイター（Walter Pater）の全作品のうち、エッセイと短編小説を翻訳・収録したもの。本人は、エッセイの「透明的性格」、「オスカー・ワイルド氏の小説」、「言いたいことのある詩人」の翻訳を担当。608 pp.
43.メリッサ・ノックス　『オスカー・ワイルド――長くて、美しい自殺』	単	2001年03月	青土社	翻訳。 単独訳。 イギリス19世紀末文学を代表する文学者オスカー・ワイルドについて、アメリカの女性ワイルド研究者メリッサ・ノックスが精神分析的アプローチを駆使して刺激的な伝記的批評を実践した。この注目の伝記を翻訳したもの。381 pp. 原著は、Melissa Knox, *Oscar Wilde: A Long and Lovely Suicide* (New Haven: Yale UP, 1994).
44.藤井治彦先生小伝	単	1999年12月	*Osaka Literary Review*（大阪大学大学院英文学談話会編）、第３８号（藤井治彦先生追悼記念号）：２０	エッセイ。 大阪大学文学研究科英米文学専攻の主任教授であった故藤井治彦教授の英文学研究者として研究活動の軌跡を簡潔にスケッチしたもの。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
45.『ロモラ』とウォルター・ペイター	単	1999年06月	１－０７． 日本ジョージ・エリオット協会編 *George Eliot Newsletter of Japan*、第３号：２．	エッセイ・研究ノート。 ジョージ・エリオットのイタリアを舞台に設定した長編小説『ロモラ』において、主人公のロモラやティートと並んで、注目すべきはサヴァナローラの人物造形である。純潔と純真に憧れた人物と設定されており、これはまさしくペイターがエッセイ「透明的性格」のなかで理想の人像像として明らかにした型に一致するのではないか。エリオットとペイターの比較研究の意味を強調した。
46.文学の倫理学と政治学に逆らって	単	1997年04月	『英文学春秋』（臨川書店）、創刊号：８５－９２．	書評。 Harold Bloom, *The Western Canon: The Books and School of the Ages*(New York: Haracourt Brace, 1994)の書評。 ブルームは、西洋文学には「正典」が厳然として存在し、この「正典」の存在を脅かしたり否定したりする批評や学派があれば断固とて戦わねばならないと主張する。文学の自律性を否定して、文学を政治的にや道徳的に読もうとする立場を絶対に認めることはできないという。２０世紀末に至って、文学テクストを外部の価値体系や思想との「コンテクスト」において読もうとする派に真正面から挑戦した、極めて興味深い批評書である。ブルームの姿勢に賛同するにせよ、反発するにせよ、文学研究の原点を考えるのにさまざまな契機や問題点を提示してくれる書である。
47.オックスフォード大学のボドリアン図書館	単	1994年06月	『大阪大学図書館報』第２８巻第１号：４－６．	エッセイ。 「ボドリアン図書館」の特徴、現代の様子、筆者の利用経験について語った文章。
48.世紀末文学とロンドン	単	1993年10月	『英語青年』（研究社）、１９９３年１０月号：３８－３９．	書評。 Karl Beckson, *London in the 1890s: A Cultural History* (New York: Norton, 1992)の書評。 イギリス世紀末文学を、衰退するヴィクトリアニズムと上昇するモダニズムのはざまにある文学と位置づけ、とはいえ、強靭さを完全には失っていないこのヴィクトリアニズム体制のなかで、「ロンドンの文学」としての世紀末文学はどのように展開していったのか。この巨大都市の光と闇の両面に対峙した文学者の群像を多面的に描出している。イギリス世紀末という時代と文化の中に文学が鮮やかに浮かび上がる興味深い書である。
49.J. ヒリス・ミラー『小説と反復――七つのイギリス小説』	共	1991年11月	英宝社	翻訳。 玉井暲、川口能久、仙葉豊、米本弘一、服部典之、服部慶子、正木建治、上村盛人、林和仁、三浦良邦による共訳。 現代批評理論のなかでもっとも興味深い派「脱構築批評（ディコンストラクション）」を率いるＪ．ヒリス・ミラーが著わした注目の批評理論書を翻訳したもの。本書は、コンラッド、エミリ・ブロンテ、サッカレー、ハーディ、ヴァージニア・ウルフの代表的小説7作について、脱構築批評から「読み」を実践して見せた小説論である。vi＋367 pp. 原著は、J.Hillis Miller, *Fiction and Repetition: Seven English Novels* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1982).
50.「知」の専門化と世紀末の批評	単	1991年10月	『英語青年』（研究社）、１９９１年１０月号：３７－３８．	書評。 Ian Small, *Conditions for Criticism: Authority, Knowledge, and Literature in the Late Nineteenth Century* (Oxford: Clarendon Press, 1991) の書評。 イギリス世紀末の「知」の領域において、たとえば歴史学、経済学、美学、生物学といったように「学問領域」が専門化される状況が顕著になり、この専門家による文学の「研究対象化」が並行して進行していく。この文学の学問化に抵抗を示し、あくまで個人的「権威」の重要性を主張したのがペイターやワイルドに代表される唯美主義の批評家であったとイアン・スモールは主張する。「知」の大変動という文脈のなかで、あくまでも個人の感性、個性、印象にもとづいて文学と取り組んだ批評家の存在を、冷静かつ鮮明に位

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
51.男性的欲望	単	1991年06月	『ラスキン文庫たより』（財団ラスキン文庫編）、１９９１年６月刊号：９．	置づけた、知的にスリリングな書として高く評価した。 書評。 Richard Dellamora, *Masculine Desire: The Sexual Politics of Victorian Aestheticism* (U of North Carolina P, 1900)の書評。 世紀末文学の特質をセクシュアリティの観点から鋭く分析した新鮮で優れた批評書として、高く評価できる書である。
52.イギリス世紀末の全貌描出	単	1990年05月	『図書新聞』、第２００５号：５．	書評。 ホルブルック・ジャクソン著、澤井勇訳『世紀末イギリスの芸術と思想』（松柏社、１９９０）の書評。 世紀末の文学者たちの群像を描いた古典的な研究書の翻訳。翻訳の労を多として評価したい。
53.多面的言語感覚のありよう	単	1989年12月	『図書新聞』、１９８９年１２月９日刊号：	書評。 川崎淳之助・荒井良雄訳編『サロメと名言集』（新樹社、１９８９）の書評。 『サロメ』をフランス語版に基づいて翻訳したもの。優れた訳文を高く評価した。
54.世紀末文学	単	1981年05月	*The Browser* （大阪洋書）、第１１号：６－１２．	書評。 Ian Fletcher, ed., *Decadence and the 1890s* (London: Edward Arnold, 1979)の書評。 イギリス世紀末のデカダンス文学の特質を多面的に研究した論文を収録した書。卓抜な論考が収められている批評書である。
55.Decadence をめぐって	単	1884年09月	*The Browser*（大阪洋書）、第２１号：５－９．	書評 Richard Gilman, *Decadence: The Strange Life of an Epithet* (1979)をはじめ、'Decadence'を論じた英米の数冊の書物を書評しながら、「デカダンス」論の現在をスケッチしたもの。
６．研究費の取得状況				
1.基盤研究（Ｂ）　継続		2012年		後期ヴィクトリア朝イギリスにおけるマスキュリニティと友愛の政治学
2.基盤研究（Ｂ）　継続		2011年		後期ヴィクトリア朝イギリスにおけるマスキュリニティと友愛の政治学
3.基盤研究（Ｂ）　継続		2010年		後期ヴィクトリア朝イギリスにおけるマスキュリニティと友愛の政治学
4.基盤研究（Ｂ）		2009年		後期ヴィクトリア朝イギリスにおけるマスキュリニティと友愛の政治学
5.基盤研究（Ｂ）　継続		2008年		１９世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティックス
6.基盤研究（Ｂ）　継続		2007年		１９世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティックス
7.基盤研究（Ｂ）		2006年		１９世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティックス
8.萌芽研究　継続		2004年		イギリス１９世紀「社交界小説（fashionable novel）」の研究
9.萌芽研究　継続		2003年		イギリス１９世紀「社交界小説（fashionable novel）」の研究
10.萌芽研究		2002年		イギリス１９世紀「社交界小説（fashionable novel）」の研究

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2022年4月現在	阪大英文学会 顧問
2.2022年4月現在	東京ラスキン協会　会員
3.2022年4月現在	日本ヴィクトリア朝文化研究学会　会員
4.2022年4月現在	テクスト研究学会　副会長
5.2022年4月現在	日本アメリカ文学会　会員
6.2022年4月現在	日本T.S. エリオット協会　会員
7.2022年4月現在	日本ブロンテ協会　理事
8.2022年4月現在	日本ジョージ・エリオット協会　理事
9.2022年4月現在	日本ワイルド協会　理事
10.2022年4月現在	日本英文学会　会員
11.2022年4月現在	日本ペイター協会　会員
12.2022年4月現在	日本ハーディ協会　顧問

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
６．研究費の取得状況	
13.2022年4月現在	日本英文学会関西支部　理事